

THE BUNGEISHICHO

文芸思潮

第25号

2008

秋号

アジア文化社

月の光の輝けば

山川弘至

日本の空に秋が来て

月の光が美しく輝き

夜空が深く澄んで来る頃に

私はいつも思ひ出す

遠い少年の日のことを

いや 尚遠い遠い わが幼年の日のことを

峠を越えて 隣の村へ 山いくつ

かかる日の夜に 我はかの道を夢に見たりき

ああ耳によみがへるもの

そはなつかしくいとも古き日本の土のごとく

ふるくあたたかきかの幼年の日のものの音なりき

詩集「こだま」より



山川弘至

やまかわ ひろし

1916年(大正5年)岐阜県に生まれる

1940年 国学院大学国文科(折口信夫に師事)卒業。続いて研究科に在籍。詩歌を愛し、萩原朔太郎にも師事

1941年 萩原朔太郎の支援のもとに牧野徑太郎らと詩誌「帰郷者」を創刊

1943年6月 応召

1945年8月 台湾屏東飛行場にて爆撃により戦死

結晶度の高い清廉雄渾な詩は日本語の粹として、最高峰の詩人の足跡を残す。

著書 詩集「ふるくに」・論文「近世文芸復興の精神」・評論集「国風の守護」

没後 詩歌集「やまかわ」(折口信夫序文)・「山川弘至書簡集」・「日本創世叙事詩」・歌集「山川の音」

第四回「文芸思潮」エッセイ賞発表

6

二〇〇八年度第四回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで今年は昨年の応募総数四三三篇をさらにまた二〇〇篇以上上回る六四五篇の作品が寄せられました（一昨年は二一二篇でした）。スタッフ一同またうれしい悲鳴のうちに、日本全国および外国から寄せられたこれらの作品を開封させていただきました。応募者の年齢も一四歳から八八歳までと、すべての層にわたり、実に多彩で、力作、秀作のいっそう多くなった今回の作品でした。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次選考、第二次選考が行なわれ、続いて第三次選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、三神弘、福岡哲司、水木亮、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。本年度は、応募数に比例して、全体的なレベルも上がり、予選を通じても優れた作品が多かったことを報告させていただきます。

今号には当選作および社会批評賞、優秀賞を発表させて

いただきますが、以後奨励賞、入選作も、できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

第五回「文芸思潮」エッセイ賞は明年も今年と同じ要領で募集する予定です。どうぞ奮って御応募くださいますようお願い申し上げます。

「文芸思潮」エッセイ賞

当選「仏桑花」

峯島 明（千葉県柏市）

当選「伴走者」

栗山恵久子（東京都府中市）

当選「書物の権利」

青羽沙月（兵庫県神戸市）

社会批評賞

「キャリア組」 矢尾博子（福井県福井市）

「清掃員の夢」 郡山 暢^{みつる}（奈良県橿原市）

優秀賞

「宣告」 三輪レイコ（神奈川県横浜市）

「こころの傷を癒すために」

北沢志保（長野県上伊那郡）

「髪匂う朝に」 榎並掬水（広島県広島市）

「妻の生還」 近藤健（東京都練馬区）

「父の杖で」 印南房吉（神奈川県横浜市）

「カップラーメン」

武藤蓑子（東京都多摩市）

「十年目の虹」 峰村佐世理（山口県下松市）

「パイロットへの道―流れに乗って―」

森 幸夫（福岡県福岡市）

奨励賞

「夜桜」 森崎房枝（東京都杉並区）

「おぼちゃん遊ば」 原田和子（奈良県奈良市）

「夏の記憶」 小林理樹（東京都小金井市）

「あの世への梵鐘―時を刻む職を見つめて―」

金田正太郎（青森県八戸市）

「リヤカーと少年」 天野美和（静岡県浜松市）

「踊って演じてこの場所にたどりつくまで」

木村令胡（福島県会津若松市）

「もうひとつの虹」 小泉博一（兵庫県宝塚市）

「命を生きて、今……」 上村和子（兵庫県神戸市）

「チベット」 片桐武男（佐賀県佐賀市）

「そのときまで生きていたい」 三尾富子（岐阜県岐阜市）

「時の止まった島」 井原博子（愛媛県四国中央市）

「支え合い」 藤井仁司（京都府八幡市）

「醜い自分にさようなら」 三月タカノ（大阪府交野市）

「夏の落し物」 田中すす子（兵庫県西宮市）

「海外で思うこと」 加納伊都（神奈川県横浜市）

選評



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

体験のあり方

三神 弘

第四回の「エッセイ賞」には六四五篇の応募があり、第一次、第二次、第三次選考を経て、一二七編が選考委員に託された。おのずと多様な作品との出会いがあり、どうしても書いておかねばならないという情熱も、また、わからない問題が生じたことから、ペンを執ることで理解に近づいていくとする意志も、伝わってくる。

さらには、文学の伝統だの、流儀だの、作法だのとらわれない書きぶりのエネルギーがあり、したがってこの多様さは、「文芸思潮」ならではの健全さといってよく、なによりも、日本語の今日を知ることができる。

当選作の峯島明「仏桑花」は、「学徒動員で激しい戦闘訓練と陣地構築に明け暮れていた」頃の回想で、「台湾の先住民である高砂族」との交流と、一族の「五歳」ほどの「娘」との、「殺伐たる陣地生活の中で、ふと人間的感情に戻るのには彼女と会うときだけであった」という日々を、南国の赤い花「仏桑花」に託して描く。

この作品は、戦争体験でありながら、過酷で、特異な状況下にあっても、そこには人間がいて、生活があった、ということの方に眼が向けられている。「終戦」により「撤退」するときに、「陣地」は「住みなれた山」になっていたともいう。戦争というものが、歳月を経て、ひとりの日本人兵士にどのように記憶されていくものなのか、ということにも関心をもたせてくれる。

当選作の栗山恵久子「伴走者」は、「知的障害とてんかんを併せ持つて生まれてきた」「長女」と母親との、長年にわたる記録であり、「私は今年六〇歳になるが、もう、一〇〇年も二〇〇年も生きてきたような気もする」という感懐と、「私はようやく、自分自身のことについて、考える時間と心の余裕が持てるようになった」「今年、臨床心理大学院に入学する」という抱負が述べられる。そして「この頃、ふと思うことがある。もしかしたら、彼女が私の人生の伴走者だったのではなかったのか」と結んでいる。

エッセイ賞 選評

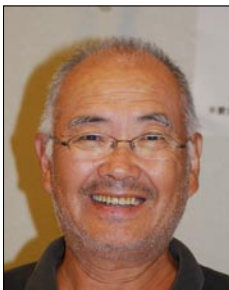
この作品には、困難な生活の経緯はもとより、人間を高め、成熟に向かわせてくれる体験のあり方というものがある。

当選作の青羽沙月「書物の権利」は、「本が好き」で「本への愛情」から図書館に勤める「私」の、「毎週、千冊単位で分類記号を付与していく作業」や「本に抹消印を押してごみ捨て場に運ぶ」などの実情と、「現代日本において図書館の経営は本のためではなく、人間の利益と金のために行われる一つのビジネスなのだ」という報告である。

この作品からは、「私」の「嫌悪感」や「途方に暮れた」「憂鬱」という感情でしか表すことのできない状況に、論理にまさる切実さを感じる。

優秀賞の榎並掬水「髪匂う朝に」は、入退院が日常の身近な出来事になった夫婦が、風呂場で髪を洗い合うことで、危うくなった記憶を確かめ合ったり、老いを認めざるを得なかったり、先行きの心許なさに惑ったりと、夫婦の絆を描いて、妖しい。

優秀作の武藤蓑子「カップラーメン」は、旅館の賄いの仕事をする女性を描くが、その働きぶりが、たとえば配膳の仕度までもが、単に作業というのではなく、たくましく生きる意志、生活態度、行動、として映つてくるところに面白さがある。



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いツ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
07 小説「海老フライ」
で第19回労働者文
学賞受賞

寝かせて推敲する

水木 亮

今年は六〇〇編を超える応募で、最終選考に残った作品はどれもそれぞれに胸迫るものがあつた。そして最優秀作品が三編選ばれたのも今回が初めてである。

最優秀の三作品のひとつ栗山恵久子さんの「伴走者」は、障害のある娘に向き合う母親の姿を愛情こめて書いている。同じく峯島明さんの「仏桑花」は語り継がれるべき台湾での戦争中のエピソードを、少女との悲しい別れを交えて書いた。さらに青羽沙月さんの「書物の権利」は、大量に廃棄される書籍への思いを、現場を経験した立場から切実に描いている。これらの三作品は優劣つけがたく、討議の結果三者同時最優秀に選ばれた。

とは言うものの、私はこれまでの第一回から第三回までの最優秀作品と比較して、今回数が多かった割りには、ど

うしてもこれを一番に推薦したいという作品がなかった。

以下特に印象に残った作品の感想を述べたい。

武藤蓑子さんの「カップラーメン」は旅館で働くパート仲間の先輩美佐子さんを、生き生きと描く。美佐子さんと対応するその場の様子も女性らしい細かい観察で伝わり、ちゃっかりした美佐子さんを楽しく彷彿とさせる。

加納伊都さんの「海外で思うこと」は生理的な面から異文化をとらえている。女性でしか書けないナイーブな描き方にどきりとした。

原田和子さんの「おばちゃん遊ば」は夜中にかかってくる見知らぬ子どもからの電話の話だが、座敷童を感じさせる子どもとの交流。そして、店じまいによる別れが淡い悲しみとなって描かれる。

菅原廣次さんの「忘れられない思い出深い味」は、物のない時代「ソーセージと味の素をどうしても食べたい」という作者に、直面してそれを食べさせてくれた母親の温かさがじんときる。まさに忘れられない思い出である。

吉阪市造さんの「番頭日記」は網走のホテルの仕事を通じて、ここに宿泊する様々な人々を見つめる観察が行き届き、この場所ならではの客の悲哀がよく書かれる。刑務所関係を始め、妻を失い旅する老人の思いなど胸を打つ。

田中すす子さんの「夏の落し物」は、小学校の頃の教室に忘れられたパンツの話だが、明るく楽しく読後感がい

い。

入賞しなかったが、佐野育英さんの「何も言えなくて、夏」は子育てを扱い、そのワークシヨップの様子が魅力的に描かれている。その課題である「名前を呼ぶ息づかい」は、子どもの頃に呼ばれていた呼び方で自分を呼んでみる。その先に浮かび上がる小さい頃の自分の姿。親から言っただけの言葉や、母親がどんな気持ちで自分を呼んでいたかが想像される。ワークシヨップを通じて、日頃気づかなかった自分の心の奥に潜在する、自分を育ててくれたものに気づき、それに対する感謝の気持ちが浮かび上がる。劇的な温かいエッセイだった。

さて全体を通して今回感じたことは、どうやら締め切りよりかなり早めに出されたエッセイより、締め切りに近いエッセイのほうが、切羽つまっているというか、よく寝かせて推敲しているせいか、伝わってくるものが多いように思える。それだけ集中して仕上げているからだろう。

つまり、推敲に時間をかけるのかもしれないと思う。そして締め切りまで時間の余裕があれば、一番いいのは自分以外の誰かに読んでもらうことだろう。自分だけの推敲だと、どうしても思いこみ、独りよがりになるからである。余計なことながらそんなことを感じた。来年にまた期待したい。

入選

- 「ベスト・フレンド―朝顔が咲く頃―」 野狐 禅
- 「一枚の作業衣」 高橋寿也
- 「亀山市の変貌」 岩谷隆司
- 「気がつけばこころの病―幸せな生還者―」 中津あき子
- 「ガンとたたかう」 小城ゆり子
- 「妻の膝っこ」 ^{あは} 土井敏秀
- 「あの時、私が見たもの」 齊藤せつ
- 「グリーな人生」 吉野はるみ
- 「忘れえぬ人」 平野ゆきこ
- 「山椿」 吉田徳子
- 「少子社会から黄金の島へ」 ヨーコ・クラーク
- 「地平線の向こう側」 小城茉莉亜
- 「大切な宝物」 富田早智代
- 「ピー缶」 池山弘徳
- 「客家の祖母より、綿々と」 安孫子かよ
- 「空気銃」 伊藤 久
- 「こんな医者には耐えられない」 坂田流々子
- 「思い上がり」 守屋正雄
- 「ネジを巻く」 鍛冶 勝

- 「番頭日記」 吉阪市造
- 「ミイラ男」 千葉早智子
- 「青いトマト」 井上初美
- 「死ぬための生き方」 鈴木みのり
- 「感謝の心」 森野斗登呂
- 「パチンコ店従業員」 前川 聡
- 「涙のエロス」 今井 夕
- 「ベトナムの風と匂いとやさしさと」 小河佳子
- 「あの年の春」 南野睦子
- 「下町の『住人』」 高木克之
- 「およびじゃない」 青井 石
- 「二人の祖父」 クロオヒロキ
- 「旅立ち」 長野恭治
- 「忘れられない思い出深い味」 菅原廣次
- 「『ジャカラダ』 咲く街」 佃 陽子
- 「虫が恐い」 齊藤美穂
- 「明日への開発」 円城寺雪



1948年生まれ
樋口一葉研究会員
著書「評伝深沢七郎 ラ
ブソディ」(TBSブリタ
ニカ第3回開高健賞奨励
賞)「遠い散歩近い旅・
山梨文学散歩」(山梨ふ
るさと文庫)ほか
URL:<http://fkoktts.hp.infoseek.co.jp>

描写の力

福岡哲司

当選三作のうち私が最も身につまされたのは「書物の権利」(青羽沙月)だった。氏が見聞きし失望した「図書館業界」はまさに現実だと痛感したからである。一言したい。

数年前、県立図書館長を引き受けて私は衝撃を受けた。図書館事業とは「時代」を超えて資料を整理、組織化して蓄積し、閲覧者の利用に備えるところにあったはずである。ところが、今や「図書館業界」ではビジネス支援、就労(農)支援、起業支援、地域の活性化支援などのための情報提供という「今日・明日」の「実用性」が先に立っていたのである。そのため、都道府県立図書館は、たとえば、「非生産的」と思われる子ども読書にかかわる図書収集や活動から手を引いて区市町村立に任せられた方がいい、文学などの「趣

味的」な「読み物」は新規には極力収蔵しなくておくべきだ。こうしたベクトルが働いていた。既にあるものは「役割分担」に応じて廃棄して、限度を超えている収蔵スペースをなんとか産み出そう、何百万冊収蔵したってキリはないのだから、と。心優しく気弱な司書たちは図書館のサバイバルをかけて行政サイドの要請に応えようとしていた。

どこからこういう考え方が育ってきたのか。図書館に限ったことではないが、発端はアメリカあたりから始まった公共性に対する市場主義であり、政府の推し進めてきた行政改革の結末だ、と私は思っている。図書館事業は莫大なコストがかかる割には「利益」をもたらさないと国、都道府県、市町村の自治体行政中枢で露見してしまったのである。稼げないのならせめて「〇〇支援」という実用的な役割くらい果たすがいいと言いつ出したのである。図書館が常に実業に関わる「効果」を産み出してきたことに彼らは気づいていない。まして、経済効果に換算できぬ、人間としての発達や精神的な潤い、豊かさなどの「意味」は想像もつかないだろう。彼らはそれが情報獲得のための基本的人権の保証であるにもかかわらず「図書館法」の「利用の無料原則」さえ迷惑に感じている。医療、福祉、教育、文化……この世の中にタダで受けられるサービスなんてあつてはいけなのだろう。コスト、カット！ コスト、カット！ 行政改革においては、例年一〇パーセントのシーリング、

人件費の削減は、いかなる公共施設でも「聖域」にはならないのだ。彼らにとって「公共」とは負担の公平の意味である。

その挙げ句、「民」の力で出来ることは「民」という美名の下、金ばかりかかって完結することのない図書館事業(に限らず全ての公共的な活動)を行政自ら経営せずに済ませる方法を考え始めた。先ずスポーツ施設から始まって文化ホールに進み、美術館・博物館・病院がやり玉に挙げられ、そして、今や、全国の図書館が嵐の中にある。それは法人への業務委託であり、指定管理者の指定であり、民営化であり、正規職員あるいは専門職の引き上げと職員数の削減である。収蔵すべき図書資料の予算は当然のことながら減額、よくて据え置きである。ビジネス支援を叫んでいた図書館活動が、今や、委託料を当て込んだ情報支援ビジネスそのものになろうとしている。ビジネスとして成り立たねば図書館も図書館資料も放置、廃棄されることが起こりうるだろう。そこからは司書の専門性はもとより利用者の権利も肝心の「書物の権利」も顧慮する眼がどこかへすっ飛んでしまっている。

「仏桑花」(峯島明)は美しく隙のない文章である。けれども、日本の植民地政策の総括も出来ていない今、「あの時代」のことを個人的なノスタルジーにしてしまっているのだろうかという懸念も、私にはある。「時」の限界と言

おうか。

入選作には、家族関係をテーマとするものが多かった。当選の「伴走者」(栗山恵久子)は知的障害とてんかんを併せ持つて生まれてきた長女から題を得ている。最後の一文が生きたためにも、養護学校入学以降現在までの部分を更に書き込んでいけばよかっただろうと惜しまれる。優秀賞の「十年目の虹」(峰村佐世理)も「家族」がテーマである。それがいかに狂いやすい、微妙なバランスで成り立っているかということ。バランスが狂った時「家族」というものがどんな桎梏になるか。これを表現するための筆者の構成の工夫がある。「親が子供にとって絶対の存在であるという認識の危うさを、私は世間に問うてみたい」と「家族」が桎梏であることを告発しているのが「こころの傷を癒すために」(北沢志保)だ。「親はあっても子は育つ」という痛ましいパラドクスは今も真実かも知れない。

夫婦に焦点を当てた作品もあった。優秀賞「カップラーメン」(武藤蓑子)はガンで闘病中の夫を思う余りの「善意の無理理解」に夫の死後気づくという作品である。登場人物のキャラクターもあつて笑いながらほろりとさせられる味がある。同じく優秀賞の「髪匂う朝に」(榎並掬水)は不安感を紛らす時に必ず行う妻の意識せぬ行動、それをそのまま受け止める「私」の思い。夫婦の阿吽の呼吸が感じられて温かい。「妻の生還」(近藤健)は深刻な事態を描き

ながらユーモアさえ感じてしまうのはなぜだろう。若い妻の個性もあるが、筆者が事態の推移を冷静に見つめ、描写を積み重ねている力によるのしか思われない。

「清掃員の夢想」（郡山暢）は社会批評分野での入賞だが、作品は社会批評的筆致に及ばない方がよかったのではないかと感じた。なまかな平和論や教育論は「夢想」の域を超えず、力がない。むしろ、筆者が現場で目の当たりにした人や分別の様態の描写の方が遙かに精彩を帯びている。ここを中心に文字をもっと節約すべきだったろう。

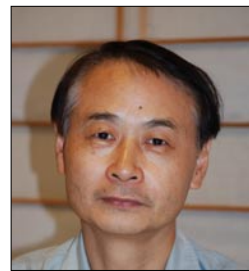
他に私個人として関心を持った作品を挙げる。「夏の落し物」（田中すす子）は小学校低学年の教室を描写している。うまい。「番頭日記（抄）」（吉阪市造）は特殊な立地にあるホテル勤務経験をもとに書かれている。（抄）とあるのだから書きためていろいろが、いい味を出している。観察から出来た一文としては「バチンコ店従業員」（前川聡）も印象深く、余韻が残る。「あば（妻）の膝っこ」（土井敏秀）は漁師からの聞き書きである。以前から応募作に聞き書きの作品が一、二交じることがあったが、こういうスタイルの活かされる「生活・民俗記録」のような分野があってもいいのかもしれない。

自殺やリストカットに関する作品も目立ち、いかに現代の生活者が、ある閉塞の中で傷ついているかも見て取れた。それらの底には様々な状況下で精神やつながりが傷つき断裁される無惨な生活崩壊の気配が感じられ、逆にそれを乗り越えようとする姿が現代の一つの相として浮かび上がってきた。

当選作の「伴走者」、優秀作の「宣告」、「こころの傷を癒すために」、「十年目の虹」、「妻の生還」などの作品には、それらの運命を乗り越える人間の苦闘と輝きがある。

「伴走者」はその運命を、人間が受け入れ、肯定する強い力を表している。この作品には、ここには書かれていない苦闘を、「よし」とする人間の真の輝きがある。確かに子供の姿は描かれていず、文章は書き慣れていないが、それに目をつむっても推したいものがあつた。

「仏桑花」は戦争中の台湾の少数民族・高砂族（たかそう）と一兵卒の交流を描いたもので、当時の日本軍と少数民族との関係がこれほど鮮やかにわかるものはめずらしい。日本軍の、少数民族を取り込む傲慢なやり方も、逆に利用される高砂族の立場も、またその純朴な生活もよく見える。しかし戦争という状況下で、素朴な筆者の性格により、人間としてのふれあい色彩を帯びて浮かび上がってくる。「仏桑花の花をレイのように首に巻きつけている」五歳の頭目の娘の姿は、戦争や民族差を超えた人間の真のつながりを象徴し



いがらし つとむ

生活崩壊の気配——日本の現状

五十嵐 勉

第四回の今回は、応募総数に比例して秀でた作品も増えた。最終予選に残ったものは各賞、入選と決めるのが惜しいほど、それぞれに皆訴えてくる力を持っていた。力作、労作が多く、それによって全体のレベルが上がっていた。ただ、タイトルの付け方が抽象的で曖昧な傾向が見られたことは残念である。不適なタイトル、内容がよく象徴されていないタイトルが上位入賞者にさえ見られた。

例年、病との闘いをテーマにした作品は多く、その切実さには今年もやはり胸を打たれたが、今回はそれに加えて、障害者を家族に持ち、様々な危機を越えて共生に命の深い意味を見出す作品も少なくなかった。また一方で、家族の崩壊を描き、そこから再生する題材もいくつか見られた。

て映る。日本軍の少数民族政策は実際にはもっと苛酷な面もあり、おびただしい悲劇も生んでいるはずだが、肩肘を張らずに素直に描かれているところに、一兵卒の行動を信じている物語の基盤を感じる。日本軍はアジア各地の前線で高砂族を「勇猛な高砂族」としてさんざん利用し、犠牲を強いながら、戦後、日本政府としては何の補償もしていない。ただ「ヤマトダマシイ」を植え付けられ、日本軍に忠誠を尽くして死んでいった高砂族の人のよさが、仏桑花を首にかけたその幼子の顔と重なって浮かび上がってくる。その意味でもこれは強く推したかった。文章も確かである。「書物の権利」は、文化の危機を強く感じさせる点で、取り上げる必要を覚えた。ラストの大量の書物の処分は、ナチスのユダヤ人の大量虐殺を連想させる。現在日本でこのような文化の破壊が進行している現実を知ってほしい。過去の宝を大事にしない者たちに、輝く未来はない。命を超えて残された尊いものを抹殺する行為は、自らの未来をも必ず危うくするだろう。

エッセイ賞の選考をして感ずるのは、全体として作品を眺めてみると、日本の現状をよく表しているということだ。いま日本はこうなっているのか、これが現在の日本の姿なのかという実感が得られる。

社会批評賞の「キャリア組」も、日本の中枢を担う官僚の実力や姿勢を摘出して、衝撃的である。このような姿勢、

第5回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定●400 次詰原稿用紙 5～10 枚（原稿用紙使用の場合は必ず A 4 原稿用紙を使用のこと／B4 は失格）。

ワープロ原稿は A4 用紙 40 字×30 行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400 字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave @ qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金 3 万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金 1 万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切●2009 年 4 月 30 日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は 2009 年 7 月末発売の「文芸思潮」ウェーブ 30 号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は 2009 年 9 月末発売の「文芸思潮」31 号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

このような展望で官僚のトップレベルが動いているとしたら、日本の未来は暗澹としたものだろう。組織化しやすい日本国民の体質は、一方で閉塞状態のなかで腐りやすい傾向を帯びるのは必然だが、外部からの大きな刺激によって変容しやすい側面をも持つ。外からの刺激をよい方向に変えてダイナミックに変革を行なう人物の登場が日本の歴史を作ってきた。すでに神話にすぎないかもしれないが、その点まで期待させる点で、この作品を評価した。

「清掃員の夢想」は提言が新鮮だった。確かに人間は自らの排出物、ゴミや二酸化炭素や核物質で減ぶかもしれない。それを共通の問題として共生基盤を造ろうとする試みは、おもしろいかもしれない。国連に排出処理部と資源部を併せて作るとは斬新であろう。実際は切迫している問題である。

優秀賞「髪匂う朝に」は文章がいい。肌触りを感じさせるみずみずしい文章は一流である。近藤健氏の「妻の生還」は、現実から逃げないその意志に人間の尊厳がある。印南房吉氏の「父の杖で」は、戦争をも背景に歴史を超えての父子の人生の実感を表出しているところに深く豊かな命の充実感が漲っていた。連続四回の入賞には敬意を表する。「こころの傷を癒すために」も、母子の関係さえ破壊される家族の姿が人間の傷みとして迫ってくる。

その他取り上げられないが、実に多くの作品に心を捉え



選考会風景

られた。それぞれに皆耐え、闘っている現実がある。それに深く頭を下げ、その闘いが一つの輝きとして光を放ち続けていることに拍手を送りたい。

ぶっそうげ 仏桑花

峯島 明

夏も近付き、ハイビスカスの鉢植えが、縁日や花屋の店頭などでぼつぼつ見かけられるようになった。

この花はアオイ科で、葉は桑に似ていて、ムクゲのような赤花が葉腋に一輪ずつ咲く。日本では露地越年は無理のようだが、南方諸地域ではいつでも見られる常緑低木である。

私もかつて台湾にいたころ、この壮麗な群落と何回となく出会っている。紺碧の空と鮮烈な赤がよく調和して、いかにも南国らしい景観が印象的だった。

私たちは、そのころこの花を佛桑花と呼んでいた。

私はこの花を見かけるたびに、しばし店頭に行むのが常である。そして追憶の果ては、いつも決まって、幼い女の子の顔が花とタブって浮かび上がってくるのだった。

女の子は、戦時中、私たちの部隊が陣を構えていた蕃社の頭目（酋長）の娘である。

そのころ、戦局は悪化して、沖縄にはすでに米軍が上陸し、台湾侵攻も間近の情勢下にあった。私は台北の師範学校に在学していたのだが、学徒動員でこの部隊に入隊し、激しい戦闘訓練と陣地構築に明け暮れていた。

そんなある日、私は突然、中隊長に呼び出されて、陣地奥の高砂族との接触を命じられた。山岳のゲリラ戦では、山の住人たちの協力が不可欠、重要であったからである。

高砂族とは台湾の先住民である。彼らは中国漢民族を祖に持つ本島人と違って、マレー・ポリネシア系の民族で、台湾に住み着いたのは千年乃至三・四百年前といわれている。つまり彼らが台湾の原住民なのだが、十五・六世紀ご

ろに台湾対岸から移住してきた漢民族に追い払われ、各々山地に散在するに至っていたのである。

ところで、私は中隊長の突然の下命に、任務への不安よりも、むしろ、なぜ自分がそれを選ばれたかの方が不安だった。そのころ、私は幹部候補生とはなっていたが、所詮は初年兵の身である。何かの間違いではなかったが、もちろん反問や辞退などは許されることではなかった。

しかし、中隊長の細かい指示の中で、同行者としてモウの指名があつたとき、私はやつとその理由が分かり、同時にほっと救われた気持ちになったのである。モウは私と同じ中隊にいた高砂族出身の兵隊であつた。

この高砂族は、日本統治下では日本国民として扱われ、その皇民化が進められていたのである。当局や軍の工作もあつたと思われるが、この大戦にはかなりの志願兵が参加し、私の部隊にも彼らの一隊が編入されていたのである。彼らは志願兵としての誇りを持ち、日本兵の一員という気概に溢れていた。

しかし、この高砂族兵に対する古兵たちの噂は決してよいものではなかった。古兵たちには軽捷、剽悍、山地をものとみせず駆け巡る高砂族兵への妬みもあつたのであろう。陰では生蕃と呼び、ことさら蔑む風があつた。

ところが、私は生来無頓着で、それがあまり気にならず、彼らと出会えば平気で挨拶を交わしていたから、彼らはそ

れがよほど嬉しかったのであろう。モウは彼らのボス格であつたが、何かと私に近付き、ときにはお互い肩を叩き、談笑することさえあつた。

おそらくは、私と高砂族兵たちとの関係が誇張されて中隊長の耳に入り、その上での選抜であつたのであろう。

ある日、私とモウは渡された酒やタバコ等を持って、谷の遙か上流にあるタイヤル族の蕃社を訪ねた。

蕃社は狭い谷間に五、六十軒の小屋が密集していた。家々は茅あるいは割り竹で屋根を葺き、壁は薪のような木材を積み重ねた粗末なものであつた。

私たちは集落に入ると、たちまち彼らに取り囲まれた。成人の男は、額と顎に縦一文字の入れ墨をして、腰に蕃刀を挟み、女も口から耳下まで、左右に三・四センチ幅の入れ墨をしていた。みんな粗衣に裸足である。

取り囲まれたときは、さすがに不気味だったが、中の一人が「コンニチハ」と笑顔で挨拶してきたのには驚き、安堵した。彼らは当局の施策で、日本語はかなり喋れたのである。

私たちはすぐに頭目の家に連れていかれたが、モウは軍服を着ていても、自族の者と分かつたらしく、頭目は蕃語でモウに呼びかけ、二人で何か話し合っていた。

たぶん、モウがうまく話してくれたのであろう。やがて頭目は私を振り向くと、いきなり私の手を握り、日本語で

「おれたち高砂族も日本国民、なんでも協力する」と言うてくれた。モウも嬉しそうにうなずいた。

それからというもの、私とモウは彼らとの連絡係となり、中隊長に指示されて、山案内人や坑木の伐採・運搬使役の調達などと、その蕃社に度々訪れることとなった。

僅かながらも進物の酒・タバコ・医薬品の効用か、はたまたモウの内助の功か、私はすっかり頭目の気に入られたようであった。仕事が一段落すると、集落の長老たちを交えて粟酒を飲み交わしたが、頭目は酒に酔うと、「お前はおれの息子、おれの娘を嫁にもらえ」と、しつこく追って私を辟易させた。

頭目の娘は、まだ五歳ぐらいたった。やはり肌の色は浅黒いが、顔立ちは日本の子に似ていて、仏桑花の花をレイのように首に巻きつけている姿がかわいらしかった。彼女の名前はあまり長いので、私は前の方をとってサヨと呼んでいた。

サヨは恋にはほど遠い存在であったが、殺伐たる陣地生活の中で、ふと人間的感情に戻るのは彼女と会うときだけであった。サヨは親から教えられたのか、片言ながら会話もでき、すっかり私に懐いていた。

私はそんなサヨがいじらしく、仕事の合間には戯れ、日本の子の遊戲や童謡などもいくつか教えた。童謡を教えるときは、モウも蕃童教育所で習ったといって、嬉しそうに

一緒に歌うのであった。

この集落は貧しかったが、人々は素朴で親切だったから、意地悪古兵に囲まれた内務班と違って、ここは私たちに与ってはまさに天国のようなものであった。

しかし、日が経つにつれて、私にはこの蕃社行にはある憂鬱が伴うようになってきた。それは、私たちの任務の一つに、将校たちの山の地形偵察の案内人調達と随行があって、その際の将校たちの言動から、早晩、この蕃社がゲリラ戦の拠点となることに気付いていたからである。

眺めて見れば、この蕃社は貧しいが日々平和で、子供たちは無心に広場で遊び戯れている。それがゲリラ戦の拠点となれば、無辜の民である彼らは戦火に巻き込まれ、彼らの運命はたちまちにして奈落の底である。それを思うと、将校たちの山案内とは言え、彼らの破滅に関わっていることが、私にはたまらなかったのである。

しかし、それは杞憂に終わった。私たちはほどなく終戦を迎えたからである。

このとき、部隊では終戦を信じない者もかなりあったが、高砂族兵たちは全くそれを信じようとはしなかった。モウたちは「日本はほんとに負けたのか。敵は来ていないではないか」と言っ、私がいくら説明しても納得しなかった。

それは無理もないことであった。高砂族では部族間の闘

争があつた場合、負けた方は集落を焼き払われ、ことごとく虐殺されるのが常であつたからである。

しかし、そんな彼らも、部隊が終戦処理の段階に入り、武装解除が行われると、さすがに敗戦の事実は分かつたのであろう。彼らは竹藪に集まって何か相談しているようだったが、思いもかけず、陣地撤収の四日前に集団脱走をしてしまった。

おそらくは日本敗戦への失望と、以後の自分たちの処遇への不安から、それぞれ故郷の蕃社へと走り去つたのであろう。

実はその脱走前日、私はモウが私の兵舎近くでうろついているのを見ている。たぶん、私に最後の別れをと思ったのであろうが、脱走の大事は打ち明けられず、逡巡していたのであろう。もっとも私がそれを知つたとしても、どうすることもできなかったに違いないが、私はモウの心情を察し、痛恨の思いにかられた。

翌日、私は中隊長の命で、蕃社の残務整理のため、モウの代わりに兵二名を連れて行つた。私はこのとき、彼らが欲しがっていた鍬やシャベルを内緒で持ち出し、せめてもお礼のしるしとして贈つた。頭目たちは、日本敗戦のこととは彼らなりの情報で知っていたらしく、多くは語らなかつた。

婦りは頭目たちが沈痛の面持ちで、集落の境まで送って



くれたが、ついてきたサヨは、子供心にも最後の別れを悟つたのか、「いっしょに行く」と言っ、私にしがみつき、頭目に引き離されると、張り裂けるような声で泣いた。

私たちが住みなれた山の陣地を下つた日は、深い霧であつた。私たちはその中を丸腰に等しい姿で、戦闘訓練のために幾度となく往復した峠を声もなく登り下つた。

峠の道には、ときを知らぬかのように、赤い仏桑花の花が咲き続き、私たちが通りかかると音もなく肩に降りかかつた。



みねしま あきら

峯島 明

1926（大正15）台湾台中市生まれ。学徒動員で兵役に。終戦で引揚げ。法政大学文学部二部地歴科卒。都内公立中学校、私立高校など教職歴四十年。趣味旅行・園芸、目下郷土史など研究中。

思いがけない受賞に驚いています。たぶん台湾高砂族との特異な交流が取り上げられたものと思われませんが、今にして拙文恥じ入るばかりです。

実はこの稿は、私の忘れることの出来ない思い出の記ですが、一つはかつて日本の国のために戦った「高砂族義勇兵」のことを、少しでも記録に残しておきたいとの思いがあったのです。

ちなみに、この大戦に「高砂義勇隊」「高砂挺身隊」として参加した高砂族の若者は約六千。彼らの多くはフィリッピンやジャングル地帯で激戦し、勇猛果敢、数々の武功を立てました。しかし、その半数は戦死、日本敗戦による末路は憐れです。現在、どうにか生還できた高砂義勇兵たちは、今は老人となり、その多くは赤貧洗うがごとき生活に甘んじています。その理由は、中華民国政府はかつて自分たちに敵対した者として面倒を見ず、日本政府は日中外交の関係で補償を拒んでいるからです。

当時、高砂族は日本国民、高砂義勇兵は日本の国のために戦った同志です。しかるにこの不条理、私はこれを知ったときは義憤にかられました。よって私の本稿執筆の動機はここにあったのですが、紙数のみならず筆力の不足でそこまで至らず、残念に思っています。願わくば、せめて私の高砂族への思いをお汲み取りくだされば幸いです。

伴走者

パラリンピックの視覚障害者のランナーには、胸に、伴走と書かれたゼッケンをつけた人が必ず横を走っている。

手にはお互いをつなぐリボンがしっかりと握られている。伴走者は、主役である選手のペースで走らなくてはならない。早くもなく、遅くもなく。ちょうどいい速さで。そしてベストの記録がでるように。その技量と心くばりには、感服するばかりだ。感動さえする。

それは、多分、伴走者の姿に私自身の人生を映し出して見ているからだろう。

私の長女は、知的障害とてんかんを併せ持つて生まれてきた。

幼少時は、てんかんの発作も多く、せめて、発作だけで

栗山恵久子

も止まってくれたらどんなにいいか。知的障害だけだったら、どんなにいいだろうとさえ思っていた。

発作が起きると、こどもの意識はどこか、遠くへ行ってしまうって、もう、戻ってこないのではないかと不安でたまらなくなってしまうものだ。痙攣している姿をみているのもつらいけれど、「どんなふうに、体のどの場所から、発作が始まったか。どのくらい続いたか。どのような発作だったか」ということをよく観察するように医師に言われていて、次の診察の時に話さなくてはならない。つらい気持ちとぐっすりこらえて、しっかりと記録する。これは治療の手立てなのだから。すこしでも良くなって欲しいのだからと自分に言い聞かせ、くちびるをかみしめてメモをする。

固かった体がやわらかくなり、失禁して、嘔吐する。そ

して、こどもがやっと、私のところへ戻ってくる。これが、何回繰り返されたらう。彼女が一四歳の時に、国立病院に入院して、薬を合わせ、それ以来、大きな発作が起きなくなった。

本当に喜ばしいことである。三五歳になる今でも、毎日の服薬と定期的な検査は欠かせないが、毎日の生活になんらの支障もない。

けれども、親は欲張りだ。あんなに、発作さえ起きなくなれば、どんなにいいだろうと思っていたのに、知的障害であることが、とても辛く苦しく思えてきた。

親の欲張りのせいだけでなく、こどもが成長して体も大きくなり、社会へ出て行くようになると、学校という社会、世間というしがらみなどの外からのストレス。そして、思うように自分を表現できないもどかしさ、他人との距離がつかめず、うまく人間関係が築くことのできないつらさなどの、彼女の内面のストレス、そして、かずかずのこだわり、家庭内の問題などすべてが、彼女の生活に影響を及ぼし、パニックを引き起こし、気分障害をおこす、という、大変な状態になっていたのだ。こんがらがった糸のように、解決の道筋はつかめず、母親の私は、追い詰められていた。しかし、もつと、もつと、本人は辛かっただろう。パニックを起こすと、簡単には、止めることができない。彼女を家に一人残し、パニックがおさまり、静かになるまで、他

主治医に相談し、教育委員会を訪ねた。私の出した結論はこうであった。

「市立中学をやめさせます」

都立養護学校中等部へ転入し新しい学校での生活が始まった。新しい生活が始まる時はそれはまた、大騒ぎの大変さ。

バスと電車を使つての通学である。始めのうちは、一緒にのつきそい、すこしずつ、一人で行く距離を延ばしていく。そして、一人で行かせる日がやってくる。一人でいつても、心配なので、見つからないように尾行する。はたからみたら、すごく滑稽だろうと思うが、こちらは必死である。なにしろ、字は読めない、お金の計算もわからないという娘が一人で電車に乗って行くのだから。このような体験を重ねることにより、少しずつできることが増えていき、失敗を重ねながらも成長していつてくれた。

養護学校高等部卒業後、五年間、民間企業に就労した後、今は、通所更正施設に通っている。

伴走者

信頼できる主治医にも恵まれ、理解ある先生に巡り会い水泳という趣味もできた。まだまだこだわりはたくさんあるが、私のほうも、対処法の引き出しが増え、お互いなんとか、暮らしていけるようになった。この間、離婚や、私の就職など数え切れないほどの困難に親子で立ち向かって

の子供達を連れて外に出て、家の周囲をぐるぐる回っていたこともある。また、多動な彼女を連れて、一日中、多摩霊園、野川公園を走り回っていたこともある。極端な偏食。お弁当はツナサンドだけしか食べないし、夜もあまり寝ない、それなのに、どうして、こんなに、動けるのだろうか？

ご近所からの苦情、学校の先生からの苦情、夫の無理解。私の精神状態は限界に達して、ドアの外に出ることが怖くなり、人の目を見て話すことが出来なくなっていた。中学の担任は毎日午後二時きっかりになると、電話をかけてきた。

今日はこんなに困ったことをしました。
普通学級と併設しているのだから、迷惑をかけられると困ります。
精神科へ行ってなんとかおとなしくさせてください。
教室で、私が校庭を走ってきなさい、と言っても言うことを聞きません。

もう、めんどろを見られませんか？これから、S先生に車で送ってもらいます。もう、学校へ来なくていいです。精神病院に入院してください。卒業証書は出してあげます。卒業まで、一年以上。こどもにとって、一年間はとても長い。貴重な時間である。いくら、障害児だからといったって、義務教育なのに、教師が生徒を放り出すなんて。こどもにとっては、捨てられたという気持ちが残るだけ。

きた。この子がいなかったら、私はずいぶん楽に生きることができただろうに、と思うこともある。こどもの世話に明け暮れ自分のことは、すっぱり、おいてけぼり。友には遥か遅れをとってしまった。今年六〇歳になるが、もう、一〇〇年も二〇〇年も生きて来たような気がするし、まだ二四歳のままで、ストップしているような気がする。けれど、私はようやく、自分自身について、考える時間と心の余裕が持てるようになった。今からが、私の人生の始まり、ことし、臨床心理大学院に入学する。大学を出てから三十七年たって、追いついたのだ。やっと。友に。

でも、この頃、ふと、思うことがある。
もしかしたら、彼女が私の人生の伴走者なのではないかと。





栗山恵久子

くりやま えくこ

1948 東京生まれ
1971 早稲田大学第一文学
部心理学専攻卒業
1999 ケアワーカーとし
て、特別養護老人ホームに
勤務
2006 ケアマネージャーと
して有料老人ホームに勤務
2008 介護認定調査員とし
て、市役所に勤務
アライアント国際大学
CSPP 臨床心理大学院入学

大学卒業から、長いブラン
クを経て、また、心理学の
勉強を始めます。
時間がたくさんたったおかげで、インターネットで、アメリカの大学院の講義を受けられるという、とても、便利なシステムが出来ていました。
英語の勉強も始めました。「私は、」という主語をつけた話し方を学びました。
毎日が新鮮で、楽しい発見の連続です。

受賞の言葉

栗山恵久子

今回、思いがけず、受賞のお知らせを受け、びっくりしています。

私の拙いエッセイを選んでくださいます、ありがとうございます。

私の長女は生まれつきの障害と病気があります。その事実を受けとめ、彼女の人格そのものを受け入れられるようになるには、長い年月がかかりました。

時には、「どうして、私だけこんな苦勞をしなければならぬの？」と嘆き悲しんだこともあります。

でも、この頃は、彼女の生活と私の生活との折り合いをつけられるようになり、なんとか、自分の時間を持つことが出来るようになりました。

すると、今まで、押さえ込んでいた、自分の気持ち、自分の希望といったものが、言葉となって、ふつふつと、心

の中に湧き上がってきたのです。

そんな言葉たちを集めて、タペストリーを作るように綴ってみました。

さまざまなトラブルをのりこえてきた今、彼女によってもたらされた、たくさんのすばらしい出会いや体験が、キラキラと輝いて、私のまわりにあふれています。

桃子さん。

泣き虫でどうしようもなかった、世間知らずの私をここまで、ひっぱってきてくれて、ありがとうございます。

あなたは私のすばらしい伴走者でした。

これからは、「生きる」というコースを共に、走っていきましよう。

もう、伴走者のリボンはいらぬ。ゼッケンもいらぬ。あなたが、私を追い抜いていく日は、もうすぐ、そこに来ているかもしれません。

第四回
文芸思潮
エッセイ賞
当選作

Essay

書物の権利

青羽沙月

図書館の仕事を選んだ理由はと問われると、偏に本が好きだからとしか答えられない。しかし最近、本への愛情というものは、図書館人にとってさして重要な要素ではないのではないかと疑問を抱き始めている。そもそも、現代日本において図書館の経営は本のためではなく、人間の利益と金のために行われる一つのビジネスなのだ。何処の図書館も低予算、効率化が最優先で、志望者数と反比例するかのよう専任の職員数というものは年々、確実に減少しつつある。極端な場合、あらゆる業務を専門企業に全面委託して、専任の職員など一人もいないところさえ決して珍しくない。

私がこの春まで三年余りパートとして勤めていたのも、

そういった図書館からの業務委託を受ける専門企業で、私はそこで某有名私大から委託される本を毎週、千冊単位で分類していた。分類というのは、本の大まかな内容を把握して分類記号を付与していく作業である。分類記号とは、図書館の本の背ラベルに書かれている320・4とか235・4とかの数字のことで、あれは単なる便宜上のものではなく、一定の法則に基づいて内容別に細分されているのだ。例えば、210・4は日本中世史、950・2はフランス文学史というふうに。

何しろ膨大な数の上、大学の専門書なので内容も高度、しかもドイツ語やフランス語など日常茶飯事、時にはラテン語やイタリア語やスペイン語、ロシア語の本もどつと送られてくる。机の上に辞書を山積みにして頭をかきむしる

日々は、決して楽しいばかりではなかったが、少なくとも人間と向き合うよりは本とことん顔を突き合わせているほうが、厭人家の私には向いていた。理工学系のような、微塵も興味を抱けない分野の学問はともかくとして、知らないこと、分らないことを参考図書を使役して調べるという作業も、私には取り立てて苦痛ではなかったし、神学や歴史や美術の雑多な知識も、この分類という仕事には意外に役に立つのも嬉しいことだった。研究者の道を断念し、念願の図書館業界に飛び込んだものの仕事はなく、一時は世に言う引きこもりの人たちとそれほど変わらない鎖^{とこ}された生活に陥っていた私である。社会の役に立てるということが唯々誇らしく、残業が続いて身体を壊しそうになっても、無理を押して馬車馬のように働き続けた。

しかし、その会社も、今年の春に解雇された。私だけではない。二十人近くいた同僚全員が同じ憂き目を見ることになった。理由は単純なことで、仕事を委託してくれていた私大が私たちの勤める企業との契約を打ち切り、他の企業との契約に踏み切ったからである。入札で負けたのだ、と上司は項垂れて説明した。その言葉に、私は言いようのない嫌悪感を覚えすにはいられなかった。自分たちこそ図書館から業務を委託してもらうのだと、派遣会社やアウトソーシング企業が入り乱れ、血眼で鎬^{しのぎ}を削っている醜い内情は私も知っている。だが入札などと、まるでインター

しかし、その代わりに山のような洋書を文句も言わず一人で黙々と分類していたから、誰にも厭な顔はされなかった。要するに私にしか出来ない仕事があったから、居場所を作ってもらえていたのだ。だが、新しい職場ではそうはいかない。私にだけしか出来ない仕事どころか、私には出来ない仕事ばかりなのだ。六人の中でただ一人の新人である私は、てきばきと動く人たちの間で、無様に右往左往するばかりだった。

人手が足りないのだから、一日も早く即戦力に成長してもらわねば困るとばかりに毎日、新しい仕事を課されるが、私は要領が悪いので新しい仕事を一つ覚えたと、その前に覚えたことを忘れてしまう。分らないことはマニュアルを見ろと言われても、そもそも自分が何の作業をしているのかも把握できていないので、マニュアルの何処を見ればいいのか分からない。見当違いな頁を開いて首を捻っている私を、上司は呆れ果てたように冷ややかに見下ろし、もういいから蔵書印を押してと命じるが、私が押した蔵書印は三冊に一冊は必ず、二重、三重にぶれたようになっているという有り様なのだった。私は、中学の家庭科の時間に雑巾を縫っていて、やっと完成したと思ったらスカートと雑巾を縫いつけてしまったという、恐るべき不器用さを未だに克服できないままなのだ。

図書館人としての私のささやかな自信と誇りは、日々ぐ

ネットのオークションではないか。一円でも多くの金を払えるものが無条件で、掛け替えのない知的財産を管理する権利を得る。それを是とすることが、私にはどうしても出来ない。

何にせよ、無職の身となってしまう私は幾つかのアウトソーシング企業や図書館業務を委託している大手書店の面接を受け、幸い或る私大の図書館でフルタイムのパートとして働けることになった。新刊として入荷してくる本の事務的処理が主な仕事と聞いていたのだが、実際に行ってみると仕事はその倍ほどあった。本の背ラベルの作成と貼付、蔵書印の押印、無断での館外持ち出しを防止するため、磁気テープの挿入、新しく入荷する本のリスト作成、研究室から寄贈された本の処理、二種類のコンピュータ目録へのデータ登録作業等……この前までいた企業では、三つの部門に分けて何十人もの人間で分担していたことを、ここでは私も含めて、たったの六人で全てこなさねばならず、そのせいか何から何まで徹底して機械化されていた。背ラベルの作成も、私はアナログなタイプライターを使っている図書館や企業しか知らなかったのも、何もかもパソコンでやるのだと百科事典のように分厚いマニュアルを渡されて途方に暮れた。元々、私は決して機械に強くない。以前いた企業でも、エクセルの基本操作が分からなくて周囲の手を煩わせたことがあった。

さぐさに碎かれていった。対人恐怖ゆえにカウンターに出られない上、裏方の事務も出来ないで、何が図書館人だろう。そんな自嘲的なことばかり考え、憂鬱の昏い沼の底へと沈んでいった。

同僚となった人たちがお世辞にも親切とは言いがたく、三日経っても挨拶以外の会話がほとんど成立しないという状況も、私の憂鬱を否応なしに深めていった。おまけに、新人の私には言い易いのだろうか、たまに二人きりになると上司はここぞとばかりに、自分たち外部企業の人間ばかり、厄介な作業を全て任せきりにして辟易だと、大学側についての不平を繰り返し口にするのだった。

或る朝、もう一つ大切な仕事があるのだと、私は地下書庫へ案内された。そこは端から端まで見渡すことが出来ないほど恐ろしく広く、一条の陽光も射さず冷え冷えとした独特の空気の中、膨大な数の本たちが静かに眠っている。その光景に、静謐を好む私の心はいくらか安らいだ。しかし、その安らぎも上司の言葉でたちまち凍りつく。

「ここにある本は全て、置き場所がないので廃棄が決定しています。皆さんにはデータの面では勿論、物理的にもこれらの本を処分してもらわねばなりません」

愕然とするより他ない。表紙の大部分を徹に覆われた本や、紙が劣化して形が崩れかけているような本ならまだし

も、何の破損がある訳でもない、これらの膨大な数の本を全て処分するというのか。

「一冊ずつ、全ての本に抹消印を押して、適当に箱詰めしてごみ捨て場に運んで……面倒ですが、仕方ありません。仕事ですから、皆さんお願いしますよ」

私はもう耳を塞ぎたくなかった。ここは本たちの処刑場。そして私は死刑執行人なのだ。本たちは睡っているのではない。瞑目し、青ざめて顫えながら避け得ぬ運命の死をただ、待っているのだ。人間の都合だけで与えられる不条理な死を。

「何か捨てちゃうのは勿体ないわ。ここの棚のを少しだけでも、私が貰うって訳にはいきませんか？」

半ば冗談めかして尋ねた同僚の一人に、上司はにべもなく言った。

「多分、駄目ですよ。如何にも自分が貰う振りをしておいて、古本屋に売り払ってお金にするような人もいるそうですからね。」

またお金か！ 私は吐き気を覚え、背筋がぞっとした。

そもそも、これだけの不要な本たちが生まれてしまった理由もまた、金と無関係ではないはずだ。大学は予算を無理にでも使い切るため、必ずしも必要でない本も大量に買い占めるのだから。

翌日、私は辞意を表し、その大学図書館を後にした。図書館は確かに、人間が利用するためにあるものには違いない。図書館学の基本である、ランガナータンの五原則にも謳われていることだ。図書館は成長する有機体である。新しい物質を取り入れ、古いものを捨て去らねばならないのだ。私も、それを否定はしない。しかし、図書館の核たる本もまた立派な生き物で、より多くの金ではなく愛情と責任を持つ者の手に委ねられる権利を持ってはいないだろう。

本の本

本への愛情がいっぱいの本
本が喜ぶ本の本
こくのある文章の味わいは一級品
本の手触りとぬくもりがここにある

福岡哲司

山梨ふるさと文庫

1575 円



青羽沙月

あおば さつき

1978 年生まれ。神戸出身。関西学院大学大学院文学研究科西洋史学専修博士課程前期修了。現在も懲りずに図書館界を彷徨しつつ就業中。クラシカルでゴシックなもの、レトロと抒情、そして中世欧羅巴をこよなく愛する浪漫主義者。偏愛する作家は夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、久生十蘭、森茉莉、野溝七生子、日夏耿之介……etc。海外文学は 19 世紀の仏蘭西文学を特に好み、旧字体と美文がなければ三日と生きられない特異体質。一方で、無類の漫画好きでもある。2007 年 日本文学館よりエッセイ集『少女型異端者』を上梓。●「少女型異端者」は大阪市の「乙女屋」(北区浮田 2-7-9 TEL080-6180-5540 HP: <http://www.otomeya.net>) で販売中

受賞の言葉

青羽沙月

書物の権利

実は、文芸思潮エッセイ賞には当初、全く別の作品を送るつもりでおりました。今まで何度かエッセイを公募に出した経験から、私の作品は概して「他人との心の交流」という要素を著しく欠いているため、高く評価されにくいようだと感じておりましたので、厭人なりに努力してそういった作品を仕上げてみたのです。しかし結局、規定枚数を大幅に超過して応募不可能となってしまいました。次第に締め切りも迫り、一時は応募そのものを諦めかけていたのですが、当時、失業直後で不平が鬱積していたこともあり、この際、自分が身を置く図書館という特殊な業界の暗部を描いてみようかと思い立って、書き上げたのがこの「書物の権利」です。他人との交流どころか、私の偏狭な書物愛だけが綴られたような印象の、或る意味では非常に私らしい作品に仕上がりましたが、それ故に入賞は難しいと思

っておりまして、同じ図書館人の方々からも理想家の綺麗事に過ぎないと随分響感を貰うだろうと悄然としたりもしておりましたので、今回の受賞の報は正に青天の霹靂と言うより他ありません。審査員の皆様方に、心より感謝申し上げます。本当に有り難うございました。最後に、この作品で言及した図書館業務の外部企業による入札システムについて、少し訂正させて頂きます。私は所謂、一般的なオークションと同じシステムであろうと思いついていたので、そのように表現してしまいましたが、実際には逆に、どれだけ図書館側に安価を提示するかを競うのだそうです。そのため、責任を持って本を預かる意志が企業に、安上がりが代わりにならぬ見合う適当な仕事しかしない企業に無条件で負けてしまうケースも少なくないということ。やはり、書物の権利は蹂躪されていると言わざるを得ないように思えてなりません。

キャリア組

矢尾博子

Essay

一九九二年から三年間、霞ヶ関のある省で、海外留学を目指す若きエリート官僚たちのトフル試験対策コースを担当した。

月曜から木曜まで週四日、午前中二時間、二ヶ月間の集中講座で、外国人講師と日本人講師が交代で、週二日ずつ担当した。

この省では、八月の下旬に筆記試験が行われ、毎年八〇名を超える人が受験した。採点して上位二〇名を選抜する。九月、今度は面接が行われて、二〇名のなかから八名を絞り込み、講座は一〇月第一週からスタートした。

一二月月上旬には終了して、一週間後に面接が行われた。年が明けてもう一度二月下旬に面接があり、三名ほどが選ばれて、その秋、英語圏の大学へ留学していった。

わたしは八月に行われた筆記試験を作成し、採点し、一

月の面接試験まで担当した。

筆記試験を、マルバツ式の大学受験のようなものではなく、アメリカの大学のように、思考力を問う形式にした。

「二一世紀も日本は経済大国であり続けると思うか」「アメリカ一辺倒の外交をどう思うか」「二一世紀に石油が枯渇した時、日本は何を資源とするか」等の、政治経済に関する質問を三題出し、その中から二つを選んで短い作文を書かせた。

「二一世紀も日本は経済大国であり続けると思うか」という題材を取り上げた人たちの全員がイエスと答えていたが、なぜそう思うかという分析力が認められる人はほとんどいなかった。中に、直近のデータを挙げて説得力ある展開をした人も二、三人いたが、大多数はただ漠然と、新聞やテレビでそう言っているから自分もそう思う、という程

度の、中学生並みの作文力しか認められなかった。

ある年、自給率に関する出題をした。

「欧米先進国の中で最低の日本の食料自給率をどう思うか。将来、異常気象などで食料が輸入できなくなった場合、日本はどのように国民を守っていくか」と聞いてみた。

回答者のなかで、まともな思考力を持つと思える人はその一割にも満たなかった。白紙で提出した人も何人かいた。

ある人はこう書いていた。

「その時はアフリカから輸入すればいい。アフリカの人は餓死するかもしれないが、仕方がないと思います」

一瞬、これは冗談だろうか、なにも書けなくて、ふざけているのか、と思った。

これがアメリカだったら、田舎の中学生でももう少しまともな文章を書く。田舎の中学生には知識はないかもしれない。スベルも間違っているかもしれない。それでも、子供は子供なりに、自分に思考能力があることを示そうとする。

キャリア組

あらためて受験者の名簿を見ると、東京大学卒業が圧倒的に多い。その他、日本の一流有名大学の名が並んでいた。目の前の回答と名簿を比較しながら、日本の大学の質というものについて、つくづくと考えた。新聞やテレビでそう言っているから僕もそう思う、なら、いったい日本の大学

とは何をしているところなのだろう？

さらに、外交や食糧自給率という、その国の生存の根幹にかかわる問題を考えたこともない人間が、どうして霞ヶ関の行政府で働こうなどと思ったのか、不思議だった。

中に一人、ぬきんでて素晴らしい回答をした人がいた。英語もしっかりしているし、総合的に分析していた。日頃からよく読んで、考えていることが分かる。日本国内のトレンドだけでなく、広く外の世界を知っていることを示す。彼に情報力があることを示す。

わたしは彼に最高点を与えたが、彼は、面接で合格しなかった。

面接は省と人事院から担当官が一名ずつ出席、外国人講師とわたしと四人で採点していった。質問は外国人講師が中心になって行われた。

彼は、聞かれた質問にとっさにバツと答えない。一拍、二拍、間があった。

省の担当官が好んだのは、よどみなく模範的回答を返す優等生タイプだった。

わたしは、なんと残念なことだろうと思った。

如才なくバツと答えるのは、確かに頭のよさである。回転が速いのは、頭のよさを示すひとつのパロメーターである。しかし、頭の良さにもいろいろある。彼のように、沈黙があつてから答えるタイプの人間がいてもいい。

だが、彼は、八月の筆記試験では毎年最高ランクに入っていたにもかかわらず、わたしが担当した三年間を通して、結局、八人の定員にさえも選ばれることはなかった。

日本人が評価するのは、与えられたデータを要領よく要約する能力である。だが、要領がいいということ、考える能力とは無関係、むしろ正反対だと思う。与えられたデータを詰め込むのは作業であり、戦略を立てるために要求されるのは思考能力である。この二つは本質的に別なものだ。

アメリカの大学で、広いセミナー室に満席の学生を前にしてボイル教授は言っていた。

「日本人はよく丸暗記をします。小学生の頃から毎日知識を詰め込んでいく結果、高校生になる頃には、考える能力というものはなくしてしまっている」

スマートでなくても、さえないボソツとした印象でも、広く総合的に考えられる人間を認めていくべきだと思う。交渉の場に、一歩離れた位置に身をおいて、全体を見渡せるだけの人間が一人くらいいてもいいではないか？ 二〇代で模範解答がサツと出てこなくても、一〇年後、二〇年後には、それを補うだけのものが出てくる可能性はある。人材を育てるとするのは、そういうことではないのか？ それに、日本人の考える模範解答など、海外では通用しないものだ。

霞ヶ関の面接担当官が評価した、よどみなく模範的回答を返す、というのは、表現を変えれば、型に嵌っている、ということである。

多様化する国際化の時代に、模範的型しか分からない人間ばかりで、日本は、外交、農業、航空、漁業と、ズルズルと交渉に負けていく。

英語の勉強をする。外国を見る経験を積むことの意味は、ただ、欧米人がなにを言っているか、英語が分かります、という人間ばかりを必要とするためではないはずだ。大切なのは交渉能力である。交渉するために必要なのは、相手の言葉の裏にあるものを観るだけの洞察力と、相手がどのように動くかを観る想像力である。知識や言葉は、判断するための道具に過ぎない。道具を使うのは人間であり、保身や省益ではなく、国益を考えられるだけの人間性がなければ、道具などただの飾りである。日本の教育は道具ばかりで、その道具をなにに使っていくのかという人間性や、どのように使っていくかという実践能力を見ない。

そもそも、井戸の中のことしか考えないなら、なぜ留学など希望するのか？

霞ヶ関のエリートたちは、国費でアメリカやイギリスに留学して、要領よくレポートを書いたら、あとはゴルフ三昧だったなどという先輩たちの噂がチラホラと耳に入ってきたこともあった。

「霞ヶ関で、四十歳過ぎて国のことなんか考えている人なんていませんよ。みんな、自分の天下り先を見つけるほうが大事ですからね」と言った若きエリートがいた。青春時代を試験の点数獲得レースを走った優等生たちは、今度は天下り先確保レースを走っていく。

一九九〇年代を通して、ますます質が悪化する日本の行政府を通して、税金が天下り先団体に横流しされ海外に流されて国力が低下していく一方で、隣の中国では、飾りや内輪の情実など関係なく、一〇年後、二〇年後の後継者を育てていくという大きなを感じたものだ。

西洋先進国は無論のこと、中国もロシアもブラジルもメキシコも、国内にさまざまな対立や問題を抱えつつも、国益を拡大、国家を強化しようとするだけの能力を持った人材を選抜していったようだ。

日本のアイロニーは、官民学が三位一体となって、海外では通用しない島国の模範解答詰め込みレースの先頭を全力で走り、周りを見回す能力、ものごとを相対的、総合的に考える能力に欠ける人間が出世していく体制をせっせと築き上げてきた結果、「日本人は口は出すな、金だけ出せ」と言われて金を渡したら、次は、「金だけじゃダメだ、人も出せ」という、西洋先進国の下働き国家が出来てきたことだろう。

いや、下働きなら、まだましだ。安くても賃金は出る。

矢尾博子

やお ひろこ

- 1949 福井県坂井郡（現坂井市）生まれ
- 1967 福井県立、丸岡高校卒業
- 1985 カリフォルニア州立大学チコ校、国際関係論学科卒業
帰国後、上京、翻訳業、英会話講師。
- 2006 帰福
翻訳業



その昔、アメリカ大陸横断鉄道の建設に駆り出され、クーリーと呼ばれた中国人労働者は、白人は勿論、黒人奴隷でさえもしようとはしなかった過酷な労働条件で、死ぬまで働かされていた。

日本は、一九世紀の中国人クーリーどころか、建設に必要な技術や資源まで提供して、国民の税金まで使って西洋のためにタダ働きをする、奴隷よりも低い国家に成り果ててきたということだろう。

昔、アメリカのヴァージニア・スリムの宣伝に>You've come a long way, babeという表現がありました。とても長い道のりだったという思い、それが、今の気持ちでしょうか。

これまでの人生で、何を言っても「変わってますねえ」、「そんなことをいう暇があるなら、手を動かさない」とさうにひどい場合には「アメリカ帰りは」というような反応が返ってきただけ。私の言うことを理解した人など一人もいません。日頃、政治経済に関する本を読んでいる、と言ったら、「なんでそんなモン読んでいるんだ」と言われたことさえあります。

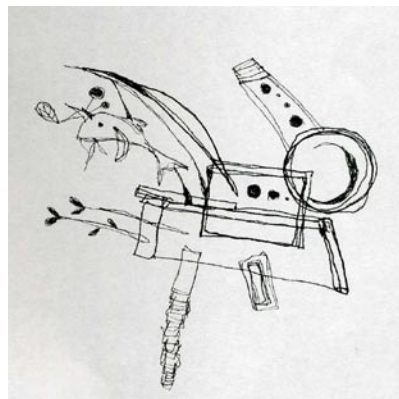
日本の人は、身の回り1:5メートル、即ち四畳半の部屋の真ん中に卓袱台を置いて、両手を広げて触れる範囲にあるものにしか反応しない、というのが、私の日本人観です。おそらく日本と西洋先進国との決定的な差だろうと思います。日本人は、形として目に見えないもの、思想や概念というものを排斥して、数字に表れるものばかりを追い求めてきた結果、国家としても存続が根底から覆され始めたのではないのでしょうか。

母校の教授は「日本人は、自分さえよければあとはどうでもいいという人たちです」と教えていましたが、国際化

の時代とは、この、あとのことを考えないと、1:5メートル内にあった日本の素晴らしい衣食住の文化さえ奪われていくということではないでしょうか？

先進国というのは、自分の家のなかだけきれいにする、のではなく、広く街全体、景観というものを考えていく精神ではないかと思えます。

私の言うことを評価してくださる方が日本にいることを知るのは、本当に、大変嬉しく思います。高校生の時、級友から「社会科の先生が、矢尾は21世紀の女だって言ってたよ」と言われてから、本当に、とても長い道のりでした。



清掃員の夢想

郡山 暢

ごみを取りながらこう考えた。

私は清掃作業員だ。くる日もくる日も町の一般家庭から出されたごみを、収集車に乗り、回収して回る。

ある時、1日だけだけごみを取っているのだらうと思いい、数えてみた。結果は1日648。週にしてみると1日はカン・ビンの日があるので省き、4日一般家庭ごみを収集するとして約2400。月だと約9600。年だと約115200になる。この数字を膨大な量であるとするか否かは、その数字をみる個人によって違うであろうが、私が清掃員であり続ける限り、または、ごみがなくならない限り、その数字は確実に増え続けるわけだ。そして、仮に私が清掃員でなくなつたとしても、600の倍数は時の流れのように途絶えることなく増え続ける。ごみを出す人間がいる限り。つまり、人間がいる限り。人間とは何ぞや？

と聞かれたとする。私は答える。「人間とはごみを出す生き物である」と。

ごみ袋の中身は様々だ。たまに袋が破裂したり、破けたりして中身を図らずも見ってしまうことがあるのだが、生ごみから、鉛筆、タバコの吸殻、各種パッケージ、生理用品、CD、カセットテープ、書類、はがき、手紙……実に様々な物がごみとして出されている。それらごみを見ていると、その家に住む人がどんな生活をしており、家族は何人くらいいて、どのような家族構成になっているかなど様々なことが見えてくる。言うなれば、ごみは人をあらわす。

こんな場合もある。我市は一応全国的な流れに漏れず、分別回収が義務付けられている。ある時、ある家のごみ袋の中からペットボトルや乾電池など分別して出さねばならないごみが、生ごみに混じり大量にだされていたことがあ

った。中身を開け、取り出せるものは取り出し、家の前に置いて行った。そうすると、その家から苦情の電話が入った。ちゃんと理由を説明し、これからごみの分別を徹底してもらおう旨を伝えた。一週間程するとまたその家からペットボトルやらなんやら分別せずに出された。そんなことが幾度となく繰り返された。ごみの出し方とは直接関係ないことであるかもしれないが、その家はモダンな洋風の家で、ガーデニング好きらしく庭は綺麗に整えられ、玄関脇には色とりどりの花々が花壇やプランターに咲き乱れていた。家は美しく飾られているが、ごみにはモラルもなくでもないということだ。

また、粗大ごみ班の者はよくまだ使える自転車や何かのパーツを持って帰ってきたりすることがある（本当は禁止されているが）。それはある者にとってはごみであるが、ある者にとってはごみでないということを表す。よく、外国人が夜中に粗大ごみ置き場から家具を持って帰ったり、リサイクル業者が壊れたテレビなどを回収して回ったりしているのを見れば分かる。そう思うと、そもそも、ごみとは何なのであるのか？

広辞苑には「①濁水にとけてまじっている泥。②物の役に立たず、ない方がよいもの。ちり。あくた。ほこり。また、つまらないもの。」（広辞苑第五版／岩波書店）と書かれている。泥でいうと、昔バリは今の美しい町並みからは

想像できないほどごみにあふれていて、その悪臭はひどかったらしく、そのごみによる細菌の繁殖によりペストが発生したと何かの本で読んだことがある。また、塵は古い中国の十進法で百億分の一、芥は千億分の一である。ごみのことを塵芥ともいう。つまり元々ごみはものすごく小さく細かな物のことを指した。しかし、今やごみのサイズは大きくなり、更に、プラスチックや鉄など自然界に自然発生的に作られるものではなく、人間が科学的に作り出し、それはそのまま放置しても、何らかの物理的・化学的作用が加わらないかぎり、半永久的に分解されることはない自然に帰れない物がごみとなっているのである。

リサイクルや環境保護が叫ばれる昨今、様々な物が分解され新たな物に生まれ変わることができる。だが、全てではない。新たに生まれ変わることができないものや、分解できないものは、くさいものに蓋をするように、地中に埋められる。江戸時代、江戸は世界一の人口を誇り、それに伴いごみの量も世界一であった。そのごみを当時の人々はどうしたか。それを海に運び、土とともに埋め立てたのだ。それが、我が国の埋め立て事業の始まりである。ではこれからもリサイクルできないごみを海に持っていく、海がある限り埋め立て続けるのであろうか。

我々の生きる社会は資本主義経済で成り立っており、そこで作り出される物の本質的な流れを止めることはできない。

いであろう。それは血流と同じで、それが滞ることは全体を死に至らしめることを意味する。生産者は日々新たな物を作り出し、我々消費者のもとへ送り届ける。それはつまり、日々新しいごみが生まれるということでもある。つい一昔前までは車や洗濯機は贅沢品でまさかそれがごみになるなど誰も思わなかった。それが今や立派な大型ごみである。新たな開発は新たなごみを開発しているのに等しい。ではごみは生産者が作っているということになるのか。しかし、我々消費者の大部分は生産者（職業として）であり、生産者もまた消費者である。生産者は非消費者ではなく、消費者もまた非生産者ではない。つまり、人類全ては等しく運命を共にし、等しく同じ責任を負っているのである。その責任のもとに同じ立場にある我々全ての人間は、遍く共通の認識を持てるのだろうか。だが、その共通認識こそがこういった問題を改善していく大きなカギとなるのである。

しかし、我々人間はそう単純な生き物ではない。有史以来人間は一度たりとも完全な平和を経験したことがない。人種・宗教・考え方、理由は様々であろうが、必ずどこかで戦いが行われている。皮肉なのは、自分たちの平和を勝ち取るための戦いもまた存在するということだ。ここまですると人間は本能的に争う生き物だと、半ば諦めにも似た考えを持ちたくもなる。もし、世界が等しく平和

を願い団結することができるとあるならば、それは更なる外敵、宇宙人でも攻めてくる他には考えられない。それは逆に考えると人間は利害関係の一致、つまり敵を同じくすることにより（当面は）団結することができるということでもある。それが一つの（本意ではあるが）事実であると考えたと、その事実を利用して団結し平和な状態も作ることと可能なのではないか。ただし、それには宇宙人に変わる、ある程度切迫した人類共通の敵が必要となる。そこに環境問題をあてはめることはできないだろうか。もし、そういった世界全体での共通認識が可能であるなら、環境問題という負の要素を通じて、戦争という最大の環境破壊のない世界をも手に入れることができるかもしれない。

既に様々な国々、行政、団体などでは環境問題に対する取り組みが行われている。それはこれからも継続されていくだろう。一方個人レベルにおいても様々な取り組みがなされ、その関心の高さは既知のところである。そういった既存の取り組み以外にもなにかないかとあれこれ考えてみると、教育なんてのはどうだろうと思ひ、考えてみた。

既に教育現場においてもある程度の取り組みはなされているであろうが、それは一過性のものであったり、部分的なもの、もしくはイベント的なものであろうかと思う。そういった取り組み方も大切ではあるが、もっと義務的であ

り継続的、且つ体系的であることが望ましい。そこで、学問としての環境、つまり環境を教科として取り入れてはどうだろうか。その内容は環境を科学的、倫理的、哲学的、歴史的にと多岐にわたる。そういったことを幼い頃から継続的に学ぶことにより、ただ環境問題に関心を持つといったことではなく、読み書き計算と同じ、できて当然、考えて当然といった状態の人物を育成できるのではないか。そしてそれは人類として環境問題に取り組む上での真の実力がつくのではないだろうか。

以上のことから、私は環境問題と戦うには3つのことが必要であると考えた。一つは即効性。それは新たな技術開発や、様々な分野、地域などで今すぐ取り組み、僅かながらでも効果が期待されること。もう一つは団結。眼先の利益などに惑わされず、協力し、仮に物理的な損失が発生したとしてもお互いがカバーしあいながら、共に環境問題と戦える協力体制を構築すること。そして、持久力。教育分野の中に恒久的に環境を取り入れることにより、環境に対する意識を持った人材を普遍的に育成すること。これらの3つをもって立ち向かえば巨大な敵に立ち向かえるのではないだろうか。

ゴミを取っていると様々なことが頭に浮かぶ。
ここまで述べてきたことはただの一清掃員の夢である。
わが町の一角に市営のマンションがある。このゴミ捨

て場の惨状は他の追従を許さぬくらいひどいもので、クソミソどころかプラスチックも鉄も電化製品もごちゃ混ぜにされてある。何度注意しても改善される気配もなく、我々が特別にそれらを収集しないかぎりマンション全体が巨大なゴミ溜めと化すことは必至だ。その住人を幾度か見たことがある。平気でそのゴミ捨て場の前を通り過ぎる様は、まるで人ごとである。この環境で生活していても感じないのだろうかと言を傾げずにはいられない。それはもはやモラルがないのではない。心がないのである。孟母三遷の教えというが、環境が人を作り、またその人が環境を作る。現在の我々の環境は他の誰でもなく我々自身が作り出したものだ。誰も責任逃れはできない。だから私はその責任を担っている世界の一人としてこの世界を生きていき、そして今日も町のゴミを取り続ける。



郡山 暢

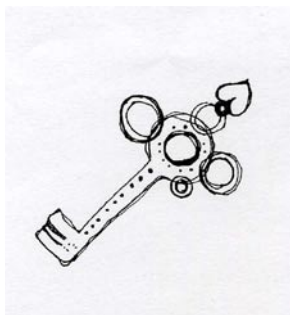
こおりやま みつる

1974年生まれ。
大学中退後フリーターを経てゴミ清掃員（奈良県 市職）に。
社会人学生として通信制大学を卒業。

その後関西大学に入学。

現在、関西大学大学院文学研究科博士課程前期。

市職は平成20年3月をもって退庁。



受賞の言葉

郡山 暢

この度は「第四回文芸思潮エッセイ賞」におきまして、「社会批評賞」をいただき、まことにありがとうございます。選考にたずさわられた諸先生方、ならびに日々文章を通して何かを伝えたいと考えている我々のような者に、発表の場およびチャンスを与えてくださっているアジア文化社関係者の方々に重ねて御礼申し上げます。

さて今回賞をいただいた『清掃員の夢』はそのタイトル通り私の「夢」です。私は元来特に環境問題に関心があったわけではなく、ただ昨今叫ばれている地球温暖化、環境破壊などの社会問題を、メディアを通じて何気なく見ていた大多数の人の一人でした。しかし、清掃員という仕事に就き、日々町のゴミを回収するという単純な作業の中

で、見える実態、感じる不満、思う理想、苛立ち、あきらめ、そういった様々な感情を抱くようになったのです。そして、それを吐露した一つの形が今回の作品なのです。

本作では最後に「ごみを取り続ける」という文句で締め括っていますが、現在は八年間続けた清掃員という職を今年の三月で辞して、新たな試みに挑戦しています。しかし、現在も前職の仲間達とは親しくさせてもらっており、この賞を受賞したことを報告いたしましたところ大変喜んでいただき、辞して少しは恩返しできたのかと、受賞した感激に勝るとも劣らない喜びを感じています。

最後に、これからも自分の視点で様々なものを見続け、それがたとえ目の目を見ることがなくとも、何らかの形にしていきたいと考えております。

父の杖で



いん な み ふ さ き ち

1929 東京浅草生まれ
22才の時に事故で左脚を失った後、(株)荏原製作所において三十数年間、各種機器装置の開発設計に従事。
1989 ライフ・ケア機器研究所を設立し、主として福祉機器用具の開発を行なって来て現在「五百円で自助具を」を推進している。

印南房吉

父は杖を二本使っていた。一本は握りが節くれ立って見るからに頑丈そうな籐の杖だったが、ついてみると意外に軽く、体重を掛けると僅かだが撓^{よこ}って歩き易かった。もう一本は握りがビカビカの真鍮の馬の首になった細身の木製で、中央からこれも真鍮のねじで上下に分かれる、如何にも英国紳士風のステッキだった。籐の杖は目の砂浜を散歩する時、洒落れたステッキは銀行と市役所に行く時と父なりに使い分けていた様である。

子供の頃、父によく

「他人の痛さを知れ」と云われた。

「ナニ、身体が別なんだ、他人の痛さがわかってたまるか」と小生意気にも心中で反撥^{はんぱ}していて父が何故私にくど

い程云ったのか考えもしなかった。だから他人どころか父の痛みもわからなかった。今更に恥ずかしい限りである。
父は明治の人、生来虚弱で代々の家業だった漁家を離れ小学校卒業と同時に上京し浅草の砂糖問屋に入った。当時は当然の丁稚奉公である。その頃の砂糖は高級食材、これは将来大いに有望だと子供心に華やかな夢を描いていたのが大間違い、二十五貫(百キロ)もある砂糖袋を山と積んだ大八車(木製の二輪荷車)を一人で曳き歩く重労働だった。ついに腰を痛めたが医者に診せても貰えずに気合いが足らないんだとあしらわれ、口惜しさ苦しさで涙を拭く毎日だったそうである。

ここで必死に考えて洋服屋に奉公し直した。砂糖問屋のお客さん達が皆ハイカラな洋服を着てステッキを持ってい

るのを見て、洋服の将来性を確信したんだそうである。此処で十年、懸命に修行して何とか小さいながら自分の店が持った。一枚だけのセピア色の写真に薄くなつてはいるが高倉健さん張りにきりつと苦味走った^{おどろ}残っている。母との縁はよく知らないが、伯父から、母が熱を上げて色々あって世帯を持ったんだと聞いた事がある。中々結構な青春だったと思う。

父母懸命の努力は大正大震災で呆気なく灰になって仕舞ったが、若さと汗で焼跡にバラックを作り、再び頑張った二十年、やっと念願の大通りに店を構え、かねがねの腹案だった既製服の販売とオーダーメイドの高級服作りを始めた。既製服(その頃は吊るしんぼとも云われて居た)を買ってくれた人にはその場で袖丈、ズボン丈、胴回りを何とか合わせるという画期的な商法である。その一方店の奥の人台に父得意の創作ジャケットを着せて並べた。洋服の生地屋から貰ったフランス・イギリス・アメリカのモード雑誌にポスターが所狭しと笑っていた記憶がある。これが評判になり馴染みのお客さんが次々にお客さんを連れて来てくれた。母も一計を案じて、店のカウンターに猫瓶(今でも駄菓子屋にある横型のガラス瓶)を置き煎餅と飴と雷おこしを一杯入れて並べた。お客さんも店の職人さんも勝手に取ってかりかり食べていた。人間はモノを食べると腰が落ち着くもんである。落ち着けば話し込み、大概買つてく

れた。内助の功である。父もお茶を飲みながらよく、

「頭あてえ、使うほど智慧が出るさ」と誉めていた。

あれ程酷かった腰痛も何時の間にか薄れて細身のステッキも傘立てに差しつ放しになっていた。父の最良の時だったと思う。

ラジオの愛国行進曲と軍艦マーチが騒々しくなるにつれ、好況の時代はアツと過ぎ、店の職人さん達も次々に召集され、長兄も出征した。その前夜、父が台所の隅に立って拳で涙を拭うのを見た。母も割烹衣の袖で泣いていた。寂しく厳しい時代になったのである。仕事も国民服ばかりになって、父が三十年来叩き込んで来た技術も活かし様がなくなった。それでも店は客が増え否応なく大きくなった。

こうして昭和二十年三月十日、東京大空襲——下町は轟々と炎上し、十数万人が灼かれ溺れて死んだ。父母と七歳の妹と三人は炎に追われて隅田川目指して必死に駆けつけた。浅草から向島に架かった広い言問橋を渡り切れなかった。橋が向島から逃げて来た群衆と荷物でギッシリ詰まっていたのである。渦を巻いて熱風が地を迫って来た。咄嗟に三人で橋の欄干を乗り越えて四メートルを飛降りた。大正大震災での経験が生きた。運良く桜道の土の上だった。この時父は激しく腰を打ったが三人とも生きて歩けた。と、その瞬間、橋上に絶叫が響き渡った。人間が燃えた。踊りながら一斉に燃えた。山ほど背負った荷物もろともグオー

ツと燃え上がった。

「人間がな、ボウボウ燃えるんだ。松明だな。空もな、川もな、一遍に燃えたんだよ」

父は再会出来た私にこう呟いた。妹も目を見開いてコックリ領いた。母は、

「アノ声がな、人の声が、夜中にな」と息を詰めた。

その後三人は銚子の父の実家に戻り祖母に小さな家を建ててもらって三毛猫と鶏六羽と一緒に暫らくは平穩に暮らした。五分も歩けば太平洋が見渡せる砂丘の蔭だった。父は毎朝産み立ての卵が食べられるよと小さく笑っていた。腰はもう良くなり時々運動がてら起き抜けに籐の杖をついて海沿いの砂道をゆっくり歩いてた。夕焼けが好きでよく巖に腰掛け杖に両掌を重ねて眺めていた。多分、炎の空を重ねていたのだろう。

数年後、私が事故で左脚を失い義足を付けて久し振りに帰った時、父と一緒にビールを呑みながらしみじみと云った。

「人間にはな、持って生まれた運があるんだ。焦るなよ、頭あ使つてな、ゆっくり頑張れな」

もう他人の痛さを知れとは云わなかった。

今、父の杖を私がついている。水平線を見渡すたびに太い籐の握りから父の声がジーンと伝わって来る。

「夕焼けはやっぱり海がいいな」

父の齢を超えて父の言動が少しずつ胸に響き、父の杖をつくと掌に声が伝わってくる。そんな中に懐かしい父の笑顔がある。

私の中学合格発表の朝、突然父と一緒に行くと言いだした。寒い隅田川を二人で黙って歩く靴音が言問橋にキーンと鳴った。

合格していた。父は何度も番号を読んだ。帰途、角の大きな蕎麦屋で父は嬉しそうに「好きなものを食べな」と云い、自分は「抜きで一本」とぶつきらぼうに注文した。抜きで一本ってなんだろうかと思ひながら天井をワクワク待っていた。

来た：蓋を取る：フワーツと天井の香り、大きな海老が三本：美味かった。と父が「よかったなあ：うん、よかった」とニコリ笑い小振りの徳利から盃にトコトコと酒を注ぎ、もう一度領いて、

「よかったなあ、おい」と、くいつと呑んだ。抜きで一本とは蕎麦抜きの天ぷらそばとお銚子一本の事だと初めて知った。この時の父の笑顔は今も眼前にある。同じ笑顔で今回の受賞を喜んでくれているだろう、多分、

「うん、よかったぞ」と云いながら。

宣告

「こんにちは？」「お名前は？」「どうやって来たの？」

……掌におはじきをのせ、美秋が取ろうとするとさっ、と手をひっこめる。また掌にのせる。手を出す、ひっこめる……。美秋はジリジリするが「ちようだい」を言わない。

……言えない。マグネットつきの「ひらがな」を渡されて、美秋がそれをデスクのサイドに貼っていく……。

そんな、次女と医師とのやりとり。次女は飽きたのか、保健士に玩具をあてがわれて一緒に遊びだした。

三十代前半だろうか。子育ての経験もなさそうな女医は、さらさらと次女についての診断を語り出した。……抑揚のない説明は私の耳を素通りしていく。前置きはいいのだ。言葉が遅いのもじつとしてられないのも、きちんとやりとりできないことも……百も承知だ。今まで「不安」「疑い」

三輪レイコ

「可能性」……誰も決定権をもたずに蛇の生殺しだった。

その答えを出したくてここへ来た。決定的な言葉がいつ来るのか、来ないのか……戦々恐々としていた。

「……普通とは違うスタイルで発達していきます」——素通りしていく言葉が、そこへ来て杭を打たれたようにひっかかった。それはつまり……と、頭の中で翻訳しかけた時、「詳しい検査をしたわけではありませんが、私の診た限りでは自閉症です」。

宣告——それは間違いなく、それまでの私の人生で最大の宣告だった。リハビリセンターの医師にとっては、自閉症児など毎日嫌と言うほど顔を合わせていて、こんな「宣告」は日常的なことかもしれない。ただ、親にとっては死病の宣告を受けたと同じで、それを、こんな、熟練したと

も思えない医師から、いともあっさりと下されて、中身の重さと扱いの軽さにバランスが取れずにいた。

続いて、隣の部屋で待機させられていた双子の姉、千秋の診察にうつる。とは言え、一時間の持ち時間のうち既に五〇分を経過しており、残り一〇分で医師は慌しく長女とやり取りし、出した結果はやはり「自閉症」。まだどちらも二歳一〇ヶ月で診断を下す時期としては早い、「美秋ちゃん」は黒、千秋ちゃんは灰色——警察が容疑者を「黒」「白」扱いするのは誰でも知っている。啞然とした。怒りたかった。娘達の「親」として、その義務を感じた。しかし、娘達が、一生背負い続ける「障害」の烙印を押された以上、明らかに、私達は弱者、だった。

マクドナルドで昼食をとりながら、夫も私も虚脱していた。医師自身を信用できず、まして、その診断は青天の霹靂と言えた。そもそも、言葉の遅れから保健所に相談し、そこで「多動」だの「自閉」だの、I Qが低いだの……不安材料を植えつけられながら、「ここでは診断は下せないの」と市のリハビリセンターを紹介された。こちらとしては「安心して」相談したのが藪蛇となり、白黒つけたくてリハビリセンターの予約を取ったのだった。そういう意味では、見事に白黒つけられた、わけである。

誕生したその日から、娘達は信じられないような喜びを私に与えてくれた。元気で明るく、周り中に幸せな空気を

振りまいた。双子で誕生してくれたことを感謝しない日はなく、「幸せをもつてきてくれた子らや」と父は繰り返した。実家の両親も義父母も健在だが、皆七十を過ぎていた。私にはまだ、この問題を乗り越える猶予がある。しかし、彼らにはない。娘達の自閉症宣告は、彼らの残りの人生まで裏返してしまうものなのだと思います、必要に迫られるまで黙っておこうと決めた。

自閉症という「障害」。「障害」は「生涯」にわたり、本人と家族の「人生」に関わってくる。それだけに重い。大抵のことは「時間が解決する」と言うけれど、それもない。お金で解決もつかない。

乾いた井戸の底で身悶えるようだった。悲しいのか苦しいのかつらいのか……わからない。泣けなかった。泣くことは、この現実を認めてしまうことのように、泣けなかった。ただ、「この子達は大丈夫。頭いい」……現実逃避のような「信念」を曲げない夫が、せめてもの救いだった。

三歳になる九月から、二人を幼稚園に途中入園させた。「駆け込み寺」だった。「障害児」を受け入れる幼稚園だったが、自閉症の診断は伏せた。

途中入園の上、他の子らは学年からすれば一年以上だ。遅れはあたりまえ……と思いつつ、娘達の「わからなさ」加減は……というより、他の園児達との「違い」に愕然となった。言葉は勿論、先生の指示に従い、自分で判断で

き、行動する。園児達が「人間」の子供だとすれば、娘達はお尻から尻尾が生えているかのようだ。私が付き添うのは、二三日と言われたのが九月いっぱいまで延長される。そして、運命の日として刻まれていた三歳児健診。尿の採取はできなかったものの、事前に記入する問診表の大方はクリアできた。何とかなるかも……そんな一抹の期待は、保健所に着くなり木っ端微塵に砕け散った。

待ち時間から動き回り走り出し、取り押さえると海老のように反り返る。叫ぶ。床に寝転がる。夫と二人、猛獣使いのようだった。……そんな子供はいない。皆、母親とやりとりしたり座って本を読んだりしている。幼稚園と違って、娘達と他の子らに条件の違いはない。それなのに、この、決定的な違い！ 医師との問診は全くできず、リハビリセンターの確認をされた。

どこか、無人島のようなところで、娘達とだけ暮らしたい……そう思った。育児書やよその子供と「比べる」ことをしなければ、二人とも良い子だった。男の子以上に活発でクタクタになることはあっても、一緒に暮らしていて、育てにくさ、不自由さ……を感じることはない。「普通」って、何だろう。誰にも迷惑をかけず、夫婦にとつて最愛の存在であるなら、何の問題もないじゃないか……。

既製の「物差し」をあてがうことはやめよう、と思う。思うのだけれど、まざまざと目にする、他の子らと我が子

との違い。これが「違い」なのか、「違う」のか……。日々園児達を眺めながら、私の思考は揺れ動く。リハセンの女医が、はつきりと宣告したじゃないか……。でも、娘達の主治医は二歳健診で「異常なし」。言葉の遅れは幅があり、「経過観察」ですらないと言った。それでも心配なら保健所へ相談すれば、と持ちかけられたのだ。

育児書にある「自閉症の特徴」は何度読み返したか知れない。明らかに「違う」と思う点もあり、それをリハセンに電話相談したところ、「自閉症は十人十色」と言われる。一体、「十人十色」の自閉症とは何物か、と思う。我が子の「障害」を認めたくない、認められないだけなのか……。ただ、乳幼児期の発達は急なので、診断は長期に渉り慎重に行われる、とも書かれていた。

三歳児健診から間もなく、仕事の打ち合わせの帰り、「三輪さんのお子さん、可愛いでしょうね。私の姪が、ちょうど三輪さんのお子さんと同じ年なので」と言われ、何とも言えぬ気持ちになった。

これから、こんな何気ない、露ほどの悪意もない言葉に、嫌と言うほど傷つくのだ……。障害児の親だから不幸だとは思わない。健常児の親だとて、死ぬような思いを味わうことは幾らもある。一度しかない人生なら、障害児の母親を経験してもいいではないか、そんなふうに思いはしても、現実には、それは途方もない覚悟のいることなのだった。

そうして帰宅した私を、バジャマの長女が「お帰り」と迎えてくれた。一時を過ぎていて、夫は子供を寝かしつけながら寝てしまったようだ。私の琴線の糸が切れた。医師から「灰色」と診断された、次女よりは「普通」に近いと思われる長女、千秋を抱きしめて、私は泣いた。千秋は、身動きもせず、黙って抱かれていた。それが自分の役割と知っているかのようにじっとして、それがいじらしく、私は絞り出すように泣き続けた。

十一月、リハセンで心理相談というものを受けた。これは主に、障害児の親の悩みを聞くものらしく保健士が対応する。待合室で、毛布にくるまれた、言葉もない、寝たきりの子供を母親が抱いていた。優しく話しかけ、微塵の翳りも見せず、私達に気を遣って抜けたような明るい声で話しかけられた。一体、この明るさに辿り着くまでに、どれほどの思いを味わっただろう……私は壁を向いて泣いてしまった。自分にできるだろうか、と思い、気が遠くなるようだった。

ところが、診察が始まり、諸々の診断をした後、保健士は「自閉傾向はあっても自閉症ではないかもしれない」と見解を述べた。個性で終わる可能性があると言われ、狐につままれたようだった。

そして翌十二月、「自閉症」と診断した医師の再診を受けた際、医師が下したのは「自閉症ではないかもしれない

けれど、支援の必要な子らだと思う」——。自閉症ではないかもしれないなどと、よくも軽々しく言えたものだと思える。「支援の必要な子らだと思う」と、またもや、憶測で物を言うのか……!

あれから、二年以上の月日がたった。娘達は語彙力も身につけ、幼稚園でも驚かれるほどの成長を見た。年長の今では、小さな子の世話をよくしているらしい。リハセンに行く必要はなく、例の医師ともあれきりだ。

自閉症ではないらしい。ホッ、とはしたけれど、よかった、という思いとは少し違う。

自分が自閉症の娘達とどのように生きていくのか、それは想像の及ばないことなのだ。

「宣告」は、つらいものだった。もう、あんな思いは御免だと思ふけれど、とても、貴重な経験だった。あんなことがなければ到底、考えないことを考え、感じ、思った。一生に何度もない、かけがえない経験だった。



三輪レイコ

みわ れいこ
1963 年大阪生まれ。
青山学院大学文学部卒業後、出版社に勤務。
「ベビーフェイス」で映画シナリオ新人賞受賞。以後、シナリオライターとして活動。
最近では舞台作品「Life is……」「ハニー&アップル」が公演される。

受賞の言葉

三輪レイコ

文章を書き出して随分になります。ただ、その多くは創作というフィクションであり、今回のような自らの経験をそのまま、脚色なしにまとめたものを書いた経験は少なく、それがこの度、多数の応募作の中から選ばれたこと、大変に嬉しく光栄に感じています。

タイトルでもある「宣告」を受けた七月二〇日を、今年は今全く忘れていました。娘達と花火見物に興じていたのです。それは、本当に幸せなことです。三年前を思えば奇跡のようなことかもしれません。

ただ、七月二〇日を忘れても、あの、「宣告」を通して経験したこと、感じ、思い、考えたこと……。それは忘れなくなかったし、忘れてはならないと思ひ続けています。そして、この、かけがえない経験を、一人でも多くの人に伝えたい思いも生まれました。「宣告」を通して、私の伝えたかったテーマが選者の方々に少しでも訴えるものが

あったとすれば、望外の喜びです。

細く長く書き続けながら、一体、自分は何が書きたいのか、模索していました。そういう意味でも、「宣告」が私にもたらした意味は大きく、それがまた、このような評価をいただけたこと、自分がこれから向き合う主題に背中を押されたような気持ちです。

年齢的にも不惑をすぎ二児の母にもなり、頭と感性だけでない、経験に裏打ちされたものを書いていきたい。本当に、何か書けるとしたら、これからかな……。そんな自分への期待をもつようになれたこの頃です。

雑誌への掲載を知らされて、これでともかく、千秋と美秋に、「こんなことがあったんだよ」と教えられる。「こんなことがあったんだ」と、彼女らが成長した後も母としての足跡を残せる。彼女らが読み返し、その時々二人の思いを想像したり……。 (笑)
ありがとうございました。

髪匂う朝に

榎並掬水

元はというと、散髪嫌いにはじまった。

若い時分から、他人に頭をいじられるのがなんとも嫌であつた。なにより、一時間も二時間もかかつてしまうのが、どだい面倒くさくてならなかつた。早いうちから髪が薄くなつていつてしまったことも、少なからず響いていたに相違ない。身不精だつた一面も、むしろのこと、否定できるものではない。そんなこんなが幾重にも重なつていつて、いつ時分からか、身近にある家内の手のうちに委ねるようになっていた。

初めのあいだは、家内も、櫛とハサミの二つ道具で恐る恐るやつてくれていた。でき栄えなどいっこう気にするでもなく、刈り終えたあとでさえ鏡も覗かない始末で、家内にしてみれば、ほっとするいつぼう、手を煩わせたただけの

勢もなにもなかつたことだろう。何年かするうち、手ぎわもしだいに上達していつて、櫛とハサミだけでは少々もの足りなくなつたのか、とうとう散髪セットなるものを買ひこんだ。

いまでは、ずいぶんと手速い。

それに、家内の手器用かげんとでもいうべきか、ときおり首筋などに触ってくる指先のかすかな感触が、例えようもなく心地よい。すでに幾十年となく私の頭で習練をつんできた手技のひとつといえなくもないが、ともあれ、このあたりの仔細は、家内の側にはぜつたいに明かせない。

「いつ頃から、散髪に行かなくなつてしまつたのだらう？」

多少の感慨もこめて、ハサミをシャキシャキいわせる耳

もとの家内に質^{ただ}してみた。

「ずいぶんとむかしよ」

などと、家内ももう、想像さえも及ばなくなつてしまつてゐる。

「四十二の厄で入院したとき、退院祝いも兼ねて病院内の理髪店に入ったのが、どうも最後だつたような気がするが――」

「へえ。すると、二十三、四年にもなるのかなあ」

男っぽい口調で応じてきて、家内もひとしきり、感慨にひたる。

「二十四年か――」

と頷き返しながら、直腸にできた腫瘍で半年ものあいだ、闘病生活を余儀なくされた往時の苦しみを、私はふと懐かしく思い起こしていた。

髪をあたつてくれた明けの日の晩遅く、今度は家内が、それと思ひ立つたようすを窺^{うかが}せながら、頭の髪を染めはじめた。

手持ち無沙汰となつてついぼんやり見やつてゐる私の方をふり返り、すっかり少なくなつてしまつた、と家内は自分の髪のほどを嘆いた。ほら、と呼びかけながら、髪染めでテカテカ光りはじめた頭を、私の目のまえにぬつとばかりに突き出してみせた。一瞬どきまぎしたものの、あえて

手先を伸ばして、染料のかげんでぬめるなかを、五本の指でそつと梳^すいてみた。思ひのほか、しつかりした感触が、手の先に残つた。ほんのすこし安堵した。ひと梳き試みたとなん、ふいに照れくさくなつてしまい、すぐさま手を引っこめた。ちよつとばかり嬉しい心境にもなつた。

湯船のなかに立ちつくしたなりで、腰をくの字に折り曲げると、洗い場の側に頭だけを突き出して、幾度となく、染めあげたあとの髪を揉み洗う。そのひと作業が、髪染めの最後の仕上げとなる。目蓋にしたたつてくる水滴を片側の手に押さえながら、もう片側で、蛇口をひねつてぬるま湯をこしらえ、洗面器に受けとめる。半分目を閉じたまま、バシヤバシヤと器のなかを掻きまわしては、湯量の溜まりぐあいをそれと確かめる。頭の真上あたりに持つていくと、髪ぜんたいをしきりに手揉みしながら、洗面器の溜まり湯をそろり落し流していく。つい見かねてしまい、脇のほどから、私が手を差し添える仕儀ともなる。

家内の指図にしたがい、頭の後ろ、前、横あいなど、少しずつ洗面器の位置をずらしていつては、そろそろと湯水をかけ流す。それを両手に掬^{すく}いとり、髪といつしよに揉みほぐす。幾度となくくり返す。かけ湯であらわになつた首筋のあたりに思わぬ視線がいき、日頃にはとても目の届かないところにはたとえ老いを見つけて、無性に哀しくなつてくる。もう少し右、と、いきなり家内のひと声。このいつ

ときの言いしれぬ心地は、あるいは、風呂場に漂う温もりのせいかもしれない。

翌朝に、入院のはこびとなった。病名は膀胱がんであった。

膀胱鏡をつかって覗いたモニターテレビの画面のうえを、長い二本の足を持つたくらげのようなものが、尿道口のすぐ脇の内壁に張りついたまま、ゆらゆらと揺れていた。肺とか腎臓とかへの転移の度合いが飛びぬけて高い浸潤性の種類とはちがい、幸運にも粘膜上だけに留まる表在性のものと判明したことも手伝ってか、担当医は、私の表情をそれとなく上目づかいに窺いながら、真性がんであることを告知した。がんが見つかったしまったのはいかにも不幸な次第だが、悪い側のもの（浸潤性）ではなかったことを幸せに思いなさい、などと、わけの分かったような分からないような巧みな言いまわしで、私を説き伏せにかかった。それから、膀胱鏡をつかって切除する経緯を、事こまやかに説明してくれた。

二十数年もまえのこと、じつは一度、直腸の腫瘍を摘出していた。全身麻酔でおこなったその折りにくらべれば、このたびの手術はさほどに難しいものではないらしく、生命にもまったくいいくらい別状ないとの担当医の口上から、私自身、意外なまでに落ちついていった。

朝のラッシュ時を避けたかげんか、予定していた時間より、小一時間も早く病院に到着した。入院手続きがはじまるまで、中央どころにある待合室で待つことにした。幾重にも並んだ長椅子のあちらこちらに、早めにやってきた同年輩と思しい老人たちが五人六人、思い思いに腰をおろしていた。どの顔も、もの慣れたようすで、もの静かで、落ちつきはらっていた。これらのうちの幾人かはきつと、同じ手術病棟で、幾日かあるいは幾週間か、寝食を共にする運命にあるに違いない。

髪を染めた昨晚の仔細が、なぜか、ちょっとした心の隙間に食い入ってきた。

なるにまかせて目を閉じると、髪を染める家内の姿が、ありありとまなうらに浮かんできた。いつになく、それとなく気を配りあった昨晚のふたりのあいだが、あえて事もなく取り交わしたひとと言ひと言が、さもぎこちないようすを伴いながら、次々に思い起こされてきた。

それにしても、家内はなぜ、私の入院という一大事をすぐ翌日に控えながら、髪を染めるなどしたのだろう。小さな疑念が、遅ればせに、私の脳裏の一隅を捉えてきた。手術の無事を祈ったことであろうか。そういえば、二十数年まえの、直腸の腫瘍を摘出したときにもそうだった。入院前夜、家内は、整理ダンスの引き出しをひとつひとつ開け放ち、収納していた衣装類一切合切を、畳のうえに放り

く攻め入ってきた。あえて抗うこともせず、そのいきおいのほどに身も心もゆだねたなり、私は、じつと長椅子のうえに竦んでいた。

不思議にも、昨晚の風呂の温もりらしいものが、いまだ両肩や背中一带に残っている気がする。なにか厚手のものを、誰かのやさしい手が、背後から両肩先にそっと覆い被せてくれたような感触が漂う。その暖の気配が、後ろのほうから私ぜんたいに、手の先、足の先々にいたるまで、しだいしだいに沁みわたる。つれて、心の奥まったところまで、なにがなし、ほのぼのと潤ってくる。

家内の染めた髪が、すぐ横あいではのかに匂った。

あるいは逆さまに、家内の単なる身だしなみに過ぎなかったとも考えられる。遠出など、ときおりいっしょに出かける際に見せてくる、いつもながらの身支度のつぎだつたかもしれない。私の思い過ぎだと思えば、存外、私の頭を刈ったついでにふと思ひ繋いだ、家内にとってみれば話のたねにも何にもならない、日常ごとのひとつにほかならなかつたのかもしれない。そのへんのところも、なにがなし、想像できようか。

ふたたび目を開けると、私は、小さな疑問を脇のほうへと押しやった。

入れ替わりに、家内と暮らしを共にしてきたこれまでの四十年近い星霜が、胸中深くに押し寄せてきた。もはやこれといって峻別できない大小さまざまな、ひとつかたちに寄り集まってみたり、かと思えばいくつかの固まり状を見せて離散したりしながら、私に向かい、延々雪崩をうってきた。それと気がついたせつな、私のなかに押し寄せてきたものは、大海の波濤のうねりと化して、心の襞々に隅な





榎並 掬水

受賞の言葉

榎並掬水

- えなみ きくみ
1938 広島県東広島市生まれ
1962 同志社大学経済学部卒業
1998 マツダ株式会社定年退職
2004 社団法人キャリアセンター中国退職
2006 第一回文芸思潮エッセイ賞奨励賞受賞
2007 第二回文芸思潮エッセイ賞奨励賞受賞
第一回シニア文学賞受賞（コスモス文学の会）
日本随筆家協会会員
広島県広島市在住



数年前とつぜん膀胱がんを患い、手術後五年のあいだは要観察、といった注意を主治医から受けて今、その予後の段階にあります。発病当時、ふたりの息子たちは成人して出払い、わが家には家内と身ふたつにあってなにかと心細いなか、とりわけこんな病魔のもとでは否応なく、万が一の事態が、私の胸を過ぎったりしたものでありました。つれて、術中とか術後などに予測されるわが身の仔細より、見守る側の家内のうえについつい思いも逸ってしまい、術前あるいは入院前の前段での家内とのちよつとしたやり取りなどが却って重きをなして、つぎつぎと脳裏に浮かんでまいりました。この作品は、そういう経緯のなかで仕上がっていたものです。

エッセイを書き始めてから、七年ばかりが経ちました。はたして七年という歳月が、エッセイを私なりモノするうえで充分な時間たり得たのか、それともいまだ短か過ぎる

のか、その辺はよく分かりません。が、その一方で、近時のニュースなどにもあるように、男子の平均寿命は七十九歳なにがしとやら、それから発するなら、古希をまわった私にして余すところひと桁の授かりものと考えざるを得ません。そんな身辺事情のなか、私の筆先たるやいまだ、道半ばの域を脱するものではありません。

このたび、ゆくりなくも、選者の諸先生に目に留めていただき、優秀賞の栄に浴することができました。余談ながら、連絡をいただいたその日の晩酌には、余計にいっぱんついた次第であります。とまれ、今次の受賞は、諸先生によるそんな私への、もうひと踏ん張りせよ、との背押しと受け止めています。先行きのなにがなし見えてきた齢ともなりましたが、この栄を機に再度短文学の道への思いを新たに、精一杯励んでまいりたいと考えます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いもうしあげます。どうもありがとうございます。

第四回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

妻の生還

近藤 健

雨がふたたび降り出していた。午後の日差しに照らされて、細い雨脚が白く光っている。

「ひとついい忘れたことがあったのですが……」
ひと通り病状の説明を終えた当直医が、再び病室に戻って来た。白衣を着ていなければ、どこにでもいる若者である。

「——先ほどいったようにですね、病状が急変する可能性があります。そのときの措置を訊いておかなければいけないのですが……」
(措置……)

私は、固唾を呑んだ。
「二つのコースがあります。延命コースとナチュラルコースなのですが……どちらになさいますか」

コース？ 耳を疑った。レストランのメニューを決めるような気安さに、哑然とした。

丁寧な言葉で、事もなげに人生の一大事の選択を迫ってくる。しかも、右手を白衣のポケットに入れたまま。傍らでは、相変わらず妻が昏睡していた。

平成十五年七月十三日。日付けが変わったばかりの日曜日の午前二時過ぎ、妻は医者から処方されている薬を、全て飲んでしまった。気づいた時には午前三時を回っていた。妻の異様な寝返りと、呻き声に跳ね起きたのだ。慌てて階下を下りて薬を確認すると、抗うつ薬、精神安定剤、入眠剤が空になっていた。十日分の分量である。うつ病を患っている妻は、ときおり深い絶望感に苛まれ、人生を放擲し

たくなるのだ。

この日、中学二年になる娘が、初めてバドミントン大会に出場することになっていた。私は午前五時半に起きて、弁当を作る予定でいた。困ったことになった……。タバコに火をつけながら最善策を練る。

まず、娘を大会に出そう。妻の過量服薬は、これが五度目のこと。それが私を冷静にさせていた。深夜という時間だが、横浜で独身寮の賄いをしている妻の母親に電話をした。その日、義母のもとに妻の弟が泊まっているはず。車を飛ばせば、四十分もあれば来れる。二人に娘のことを託し、私が救急車に同乗すればいい、それが私の結論だった。二人を待つ間、まず、弁当の用意をした。できるだけいつもと変わらぬようにした。ご飯も海苔を一センチ角に切って醬油に浸し、二重弁当にした。冷静なつもりであったが、手が震え、何枚も海苔をダメにした。

次に、入院の準備にとりかかる。衣類と健康保険証をリュックに詰め、飲み干した薬の空包をゴミ箱から拾い集める。焦るな、焦るな。鎮まれ、鎮まれ、と自分にいい聞かせる。

そんな中、妻がいつも病状を書き付けているノートに、遺書を見つけた。本当に死ぬつもりだったのか……。読む間もなく、かかりつけの大学病院の救急部へ電話を入れ、受け入れの準備を乞う。続けて一一九番。

人の気配を感じ玄関を開けると、スズメのさえずりとともに冷気が流れ込んできた。早朝の青白い空気の中に、義母と弟が硬い表情で立っていた。もう雨は止んでいた。薬を飲んでから二時間。まだ大丈夫だろうと高を括っていた。だが、大学病院までの搬送は、時間的に無理だという。

「血圧七十……、瞳孔一ミリ、意識レベル……」
救急隊員の声が部屋に響く。その一ミリが何を意味するのか分からない。ただ、逼迫した状況であることは感じ取れた。

二階の寝室から妻を降ろすのに、布担架が必要とのこと。消防車まで来た。いつもはバトカーも来るのだが、それがなかったのはずっとした。

午前五時、近所の救急病院に到着。ストレッチャーに乗せられた妻が、病院の薄暗い廊下を慌しく走り抜けて行った。妻を見送って、受付で手続きをする。やっと書類から解放されたところに、救急隊員が血相を変えて走ってきた。
「奥さん、妊娠されてませんか」

処置室の前でも看護師から、同じことを訊かれた。

「いや、太っているだけですから」

と苦笑い。薬の副作用で、ここ数年妻の体重は二十キロも増えていた。慌しい動きの中、

「あらッ、先生は？ まだ寝てるのかしら」

看護師が慌てて電話をかけている。ほどなくアルバイト研修のような若い医師が、ヌーッと姿を現した。

私は、薄暗い廊下の長椅子に座って、非常灯の明りを放心の態で眺めていた。

先生、まだ寝ぼけてますよ、と中年看護師の笑い声が漏れてくる。私は、深い溜め息をつきながら、スプリングがボコボコになっている長椅子の、すわり心地のいい場所を探していた。

処置室の向いには、病室がズラリと並んでいた。患者の寝息が聞こえてくる。好奇心に駆られ病室を覗いたとたん、ギョッとした。カーテンに閉ざされた暗がりの中で、ベッドに座っている老女と目が合ったのだ。闇の中で冷たく光る目であった。死を待つ目だと思った。二時間近く廊下にいる間、すわり心地のいい場所は、とうとう見つけられなかった。

いったん帰宅し、昼過ぎ、再び義母と病院へ向う。そのとき研修医から、コースの選択を迫られたのだ。妻を見殺しにするか、それとも心肺装置につなぎ植物人間にするか、そのどちらかを選べと。医者肩越しの窓に、真っ白な百日紅の花が、雨にうな垂れているのが見えた。そうか妻は死ぬかも知れないのだな、と遠い所で考えていた。どちらの選択もできないと思った。

薬の大半はすでに腸に吸収されており、大量の点滴で流

す処置をしている。舌根沈下が見られ、窒息寸前だった。

明後日の朝までに意識が戻らない場合は、覚悟が必要。仮に意識が戻っても、重篤な障害が残る可能性がある。唯一の救いは、三十四歳という妻の年齢、若さがもつ快復力に頼むしかないという。妻は百錠もの薬を飲んでた。

そうか、もう死んでしまうのか。ずいぶん若いな、と他人事のように考えていた。今まで遥か遠くにあった「死」が、手を伸ばせばすぐ触れるところにあった。

「会わせたい方には、会わせておいたことに越したことはない状況です」

何ともまどろっこしいいい方で、とどめを刺された。その横で、妻は何事もなかったように眠っている。

連絡をすべき者には、ひと通り知らせた。後は、待つだけであった。日曜の人氣のないロビーの長椅子にもたれていると、玄関脇の大きな桜が目に入った。葉桜の大本が大きな陰を落としている。その黒々とした陰に、背筋が凍るような恐怖を覚えた。私は何を待っているのだろうか……。夕暮れが近づいていた。

自宅に戻ると、「マケター」と上気した顔で娘が帰って来た。寝不足でやつてられなかった、とひどく不機嫌である。娘を宥めながら、ママが厳しい状況だと伝える。一瞬、娘の顔が強張った。その苦悩を娘は吞み下した。妻の過量服薬が繰り返されていることへの慣れであった。今回は今

までとは状況が違う、とまではいえなかった。長い一日が終わろうとしていた。

翌朝。午前四時に目が覚める。いつ来るとも知れぬ電話に、私は終始怯えていた。こうしている間にも妻が死ぬかも知れない。そう思うと、再び寝つけなかった。

いつもの月曜の朝のように娘を学校へ送り出し、病院へ向かう。「……」迷惑をおかけします。ゴメンなさい、妻の言葉が脳裏をかすめ、涙が込み上げてくる。周囲に悟られぬよう人を避け、道を急ぐ。

病院に着き、恐る恐る病室を覗くと、昨日のままに横たわる妻がいた。酸素マスクをつけ、何本ものチューブが妻を取り巻いている。

妻の顔を上から覗き込もうとしたとき、病室の片隅でモップがけをしていた掃除婦が、にこやかに声をかけてきた。

「——さっきまでお話し、していたんですよ」

「えッ！ 意識が戻ったんですか……」

思わず声を上げた。その声に妻が目を開けた。

「アー……ケンさん。カボチャのことが気になって……カボチャ、カボチャって、今、私言ってなかった」

「……」

酸素マスクの中でのかぐもった声。そのうちに、妻はまた眠りに落ちていった。私は転げるように病院の階段を駆

け下り、公衆電話に飛びついた。受話器の向うからは、いくつもの安堵の溜め息が漏れた。

病室に戻ると、様子を見に来た看護師が妻の傍らにいた。「あなた、酸素マスクをしているんだから、タバコはダメよ。爆発しちゃうわよ」

看護師の明るい笑い声が病室に響く。

妻の生還は喜ばしいのだが、また苦悩の日々が始まるのだなと思った。

「ここはどこ……」「何これ、どうして手が縛られているの……」「これちょっと痛いんだけど……」、スイッチを入れたり切ったりするような意識状態が、その日いっぱい続いた。

その後、妻は急速に回復し、翌日には、大幅な繰り上げ退院となった。

後日。百錠の薬を飲むのは本当に大変だった、と妻が漏らした。どうしても死ななければならぬ、と思ったという。そんなに頑張って死ななくてもいいだろう。生きていると、何かと楽しいこともあるし……。明るい喫茶店の片隅で、奇妙な会話を交わしながら、私たちはアフタヌーンティーを啜っていた。



近藤 健

こんどう けん
1960 北海道様似郡様似町生まれ。

83 龍谷大学法学部卒業。
同年、北日本石油(株)(東京)に入社。

03「祝電」第8回 随筆
春秋賞 最優秀賞

04「昆布干しの夏」
第10回 小諸・藤村文学賞 優秀賞

05「警視総監賞」
『05年版ベスト・エッセイ集』(文藝春秋刊)
選出収録

06「昆布干しの夏」
『06年版ベスト・エッセイ集』(文藝春秋刊) 選出収録

08「介錯人の末裔」
『08年版ベスト・エッセイ集』(文藝春秋刊) 選出収録

受賞の言葉

近藤 健

家事を終え、寝るまでのほんのひととき、食卓テーブルに出したパソコンに向かう。グラスに注いだ酒を口にしながら文章の糸口を探っていると、スーッと日常が遠ざかる。大粒の雨が屋根を叩きだした。乾いた土埃の匂いが窓から流れ込んできて、夏の記憶が蘇った。それが今回のエッセイになった。しばらく温めていたものを、妻の了解を半ば強引に得て、応募していた。

私のことはもう二度と書かないで欲しい、十二回目の病室から妻が電話をよこした。妻の中でエッセイが引っかかっていたのである。奇しくもその翌日、受賞の報せを得た。報われた思いを噛み締めながら受話器を置いた途端、妻

の言葉が蘇り、頭を抱えた。私がこんなに大変な思いで苦しんでいるのに、あなたはそれを食い物にして周りからチヤホヤされていい気分になっている、そんな妻の思いが。私が文章を書き出したのは、妻が病を得てからである。このままでは共倒れになるという危機感が、書くきっかけとなった。今、書くことが私の救いになっている。だが、妻にとっては、不快でしかない。文学は罪悪である。

「荒巻の歯を喰いしはる憤り」(佐藤紅緑)という歌が頭に浮かんだ。

受賞は妻からの贈りものと感謝している。
ありがとうございます。

カップラーメン

武藤蓑子

「じゃ、わたしたちもご飯にしようか。椅子持ってきてくれます」

美佐子さんはそうわたしに言いながら、さつき、お客様の朝食を出したり下げたりした後、きれいに片付けた調理台を、ふたたび台布巾でしっかりと拭いて、そこにお盆を二枚、パシリ、パシリと並べた。

わたしは、厨房の奥から、油染みたビニール貼りの丸椅子を二つ持ってきて置くと、美佐子さんがお盆に、飯茶碗、汁椀、お新香、煮物小鉢、焼き魚、厚焼き卵、焼き海苔という具合に、お客様に出すのと同じにきっちりセットしているのを手伝って、割り箸をそのお盆に並べた。

「あッ、ダメダメッ。こう、置いてください」

割り箸の置き方が少し曲がっていたのを、美佐子さんは、ピシッと力を込めて真横に直した。

こんなところの醤油の一滴を見つけるもんだ、と思いながら、わたしはティッシュペーパーでそれを拭いた。「よいしょ」と言って立ち上がったが、「やれやれ」とも言いたかった。

旅館の食事の配膳と、お給仕と、洗い物のパートの仕事なのだが、美佐子さんの完璧で手早い仕事ぶりと、鋭い目配り、細かい気配りは、誰もが脱帽するところだが、陰では批難する口がないわけではない。

「まったくねえ、あの上から目線の口の利き方、何なのあれ。それに、パシッとキツイよねえ。そりゃあもう細かいことまでよく気が付いて、仕事はよくできるし、ほんと誰もかなわないけど、だけど、口うるさくって、こっちはピリピリしちゃうよね。あの人のこだわりがあつて、そうでないと許さないって感じだよ」

確かに美佐子さんの、他の人のやり方を訂正したり教えたりする時の物言いは、ちょっとキツイし、失礼な感じだ。それこそ箸を置く位置の微少な差まで注意されると、「そこまでやるかあ」と言いたくなる。

わたしなんぞしゅつちゅうピシヤリと頭を叩かれたような気分にはせられて、内心「この野郎」と言っているのだ。とは言え、美佐子さんはいつでも何でも正しいのである。

自分たちが食べる分なんだから、何もそこまできっちりセットしなくたって、とそう思ったけれど、仕事の完璧さを誇りとする先輩の美佐子さんに、わたしなんぞが文句を言えるものではないので、「さすがですね。美佐子さんは」と、一応お世辞を言った。

先輩と言ったって、年齢はわたしの方が十も上だろう。「だって、あたりまえでしょ。それに、そこ、醤油が垂れる。それ拭いてください」

厨房のコンクリートの床の一点を斜めの目線で指して、美佐子さんはきつぱりと甲高い声で言った。

「どこですか。ああ、これかな」

もう汚れもシミも元の色も判別付かない、決して清潔とは言えない、濡れた床。掃除をしないわけではないけれど、いつでも野菜屑や天かすや飯粒が落ちている。よくもまあ

小さな旅館なので、お客様もさほど多くなく、とりわけ朝食には人手がいらない。今朝は美佐子さんとわたしの二人の手だけで足りた。

わたしもこの頃は、お新香の蕪の切り方から、厚焼き卵の厚さ、醤油差しをテーブルに置く位置、グラスの裏底の水の拭き方までも、美佐子さんの感覚や寸法を呑み込んだ。呼吸を合わせて手際よくできるようになった。なに、できなかつたって、勝気な彼女のことだから、褒めてやれば大抵なんとか治まる、とそういうことも分かってきた。

「これさあ、気になってるんだけど、こんな染色されたもの。こんなもの、体に毒だよ。わたし、いつもこれ食べないよ。捨てちゃう」

美佐子さんは、赤い汁の付いた小器を見せて、その中の小さな梅漬けをコロンと揺すってから、残飯入れにポイッと放った。

それを横に見ながらわたしは、自分の器の赤い小梅を箸で摘まむと、目の前に掲げ、恭しい様子で口に入れた。

「ああ、すっぱっ。だけど美佐子さんは有能な主婦なんですね。わたしなんか、何にも気にもせず、食べたらずきで、ダメ主婦なんです。美佐子さんは、何でもちゃんとしますねえ」

「わたし、今は自分のことだけでいいんだけど、主人が生きてる時なんて、そりゃあもう、食べる物に気を付けてや

ったわよ。あの人、ダメなものばかり好きだったんだよね。ファーストフードとか、ポテトチップスとか。だけど、わたし、ああいうもの絶対食べさせなかった。ジュースも飲ませなかった」

「ジュースは糖分のこと考えてですか？ 百パーセントのも？」

「ううん、どれも飲ませない。菌に悪いんだよ、ジュースは。菌の皮にくっ付くから」

「へええ、菌の皮にくっ付くんですか」

「そう、菌がダメになるのよ。それから、あの人、カップラーメンが大好きでね。わたしがダメって言うから、隠れて食べたりしていたの。わたし見つけると、ぜえーんぶ捨ててやったわよ」

美佐子さんはちょっと上向いて厚焼き卵を口に入れると、その箸の先で目の前の空中をつつきながら、遠い眼をした。

「痛になって、最後の頃は全く食欲がなくなつて、ぜんぜん咽を通らないのに、あんな、何か食べたいものないって聞くと、カップラーメンが食いてえって、言うのよ」

彼女のご主人は、五年ほど前に、胃癌で亡くなったのだ。

「食べさせたんですか」

「ううん、食べさせなかった」

そう言つて美佐子さんは窓に目を移した。窓の外の庭園

は、さすがに旅館らしく日本的な造りである。朝の光が池の水の上に揺らいでいる。横つちよを向いている美佐子さんの表情が、何がなしやさしく見えた。光の加減かしらと思いつつ、わたしは焼き海苔を醤油にちよいと浸してご飯の上に乗せ、「そうですか」と、ご飯の上の海苔に言うかのように答えた。

「それがさあ、主人が死んだとき、お棺に何か一緒に入れてやろうと思つて、主人の部屋の戸棚をあけたら、二段の棚にぎつしりカップラーメンがしまつてあるじゃない。わたし、テーブルの上にそれを全部出して、ずっと見ていたのよ。あんな、よっぽど食べたかつたんだね。いつか食べようと思つて楽しみにして隠していたんだ。わたしに見つかると思われしね。こんなに溜めたのに、食べないまま死んでしまつたんだね。って言つてさ」

「じゃあ、それ、お棺と一緒に入れてあげたんですか」

美佐子さんは首を横に振った。

「ううん、入れなかった」

美佐子さんは食膳に顔を戻すと、納豆の器を取り上げて掻き回しだした。

「わたしさあ、カップラーメン見ながら言ったの。あんなが、そんなに食べたかつたんなら、よし、じゃあ、あんなの代わりにわたしが全部食べてやるよって」

「そうですか。美佐子さんは、そういう体に毒なものは、

絶対食べないのに」

「うん、だけどさ、葬式が済んで、静かになつてから、わたしガン食べまくつて、ぜえーんぶ食べてやつた」

三十三回だか三十六回だか掻き回して糸の白くなった納豆を、ご飯にかけ、ザクザクと混ぜると、まあ何と、美佐子さんは激しい勢いで掻き込んだ。三口だった。

そして、すくつと椅子から尻をあげて、空になった器をチャッチャツとお盆に重ねると、シンクへ運んで行き、洗ひ出した。

わたしは、きびきび洗っている彼女の、お尻の上に結ばれている赤いエプロンの紐を、「細いウエストなこと」なんて思いながら見ていた。それから、お椀に残っていたお汁をあわてて飲み干し、カチャカチャと器を重ねて、シンクへ走るように運んだ。

と、たちまち高い声が発せられた。

「あッ、ダメダメッ。そつちで一回濯いでから、こつちに入れてくださいッ」

「あッ、そうでしたね。すみませえん」

ちよつと首を前に傾けて詫びた。その拍子に思い切り横目をして、美佐子を見たが、さっきのやさしい表情の名残もなかった。いつもの美佐子さんであった。

何だかほつとした。

受賞の言葉

武藤蓑子

暑い、暑い、と言いながら、七月が終り、なおも、暑い、暑い、と言ひ募つて、うだつておりました八月の朔。その夜、編集部の方よりお電話を頂き、受賞の知らせを聞きました。

このような朗報を得て、まるで、この暑さの盛りに、葉水を注がれた植物のような気分になりました。

やはり、このような賞は励みの機会となり、意欲をかきたてられます。文を書いている人はおそらくみなそうだと思いますが、私も、また新たな力をこめて筆を握つて、書き続けていこうと心を促されました。

ともあれ、今は単純に喜んでいるところです。どうもありがとうございます。



武藤蓑子 むとう みのこ

長野県茅野市出身

二十代より短歌を詠む

1977 角川短歌賞候補

四十代になって、小説、随筆、詩など文章をつづり始める

2003 長野文学賞随筆入選

2006 長野文学賞受賞

読書が大好きで、本から離れない

好きな作家は川端康成だが、他の作家の本を読むとまたその作家に興味を持つので、しょっちゅう好きな作家が変わる

最近、車谷長吉の本に興味を持ち、幾つか読んだ

十年目の虹

峰村佐世理

十年目の、三月三十一日が過ぎた。何の事はない。私は、いつもと同じようにバスに乗った。バスの中では、いつものように高校生が時を笑い、いつものように髪を束ねた中学生が、きりりと前を見つめていた。五番目のバス停から乗り込んだ女性は、いつものように何かに苛立って、いつものように真っ赤な口紅を塗っていた。バス停を降りると、私は、いつものように歩き、いつものように職場に着き、いつものように仕事をした。お昼にはいつものように弁当を広げ、いつものように食べた。そして食べ終わると、いつものように窓を開け、いつものように、空を見た。ブブブブブツ、と鈍いパイプ音。携帯を開け、「父さん？」と出る。それは中身が全てわかった、いつもとは違う、父の声だった。「父さん？ いい花あった？」

十年前の三月三十一日、私は中学生だった。何の事はない。私は、その頃の「いつも」と同じように、朝から部活に行き、吹奏楽部の部室で、いつものようにトランペットを吹いていた。演奏曲は、オペラ、「アイーダ」より「行進曲」。きらびやかで高らかなファンファーレが特徴的な曲だ。絶対成功させようと、午前中後輩達といつものように音を合わせた。お昼休み、友人達といつものように冗談を言い笑い転げた。お昼から、いつものように合奏。いつもと同じ春休みの一日だった。校庭の桜はまだつぼみもなく、肌寒い。空だけは突き抜けるように青く、頬を赤くした後輩が「さっき虹が出ていたんです」と言っていた。嘘だ、と皆が彼女をからかった。「すみません」

皆が揃った音楽室に、突然父が来た。反抗期真っ盛り、家族なんて超ウザイ、超ダサーイ、と盛り上がったばかりだ。私は慌てて、父の元に駆け寄った。「父さん？」もう何よ、超ウザイ！ 言いながら、私はいつもとは違う、父の様子に戸惑った。父は、いつもとは違う、どこかひきつった笑みを浮かべていた。「時間がないんだ」

私は、父と階段を猛スピードで降り、車に乗った。急ぐ車内には、ラジオがかかっていた。「大丈夫よね？」飲み込んで、飲み込んで、絶え間なく生まれて、溢れ出す不安。口にしたら、父は黙って、アクセルを踏んだ。

私の家は、商店街の中にある。山間の、少し前まで「村」だった、商店街の中だ。私の家も代々の商家で、何を売っているのか、といわれれば「なんでも」というような「スーパーマーケット」である。もちろん、昨今の大型複合商業施設からすれば、八百屋にうぶ毛でも生えた商店であることに、何ら疑いはない。父は早朝から休みなく働き、母はそれをサポートした。家事をし、育児をし、店を手伝い……。母は、いつも、ハハハハと気持ちいいほど笑う。姉が川崎氏病で長期入院していた時も、その後心臓に障害が残った時も、拒食症になったときも。私の反抗期真っ盛りの様子さえ高らかに笑ったし、何かにひどく怒った時も、泣いた時も、「笑った方がよからう。泣くエネルギーはも

つたいない」とまた笑っていた。ただいま、といえば、おかえり、と返る日常。祖父、祖母、姉、母、父、それから、家族と同じような従業員さん。私は友人と同じように「ウザイ」と言いながら、「家族」を考えたことはなかった。当たり前だと思っていた。猛スピードの車を降り、病室に着くと、皆、揃っていた。姉、祖父、祖母、母方の祖母、叔父、それから、母。——歯車の狂いを最初に感じた時は、もう完全に手遅れだった。母は、痛だった。検査をした時はもう、がん細胞が全身に行き渡っていた。それでも母は、「大丈夫よ」とやはり笑っていた。自慢の黒髪が全て抜け落ちても、人口膀胱を下げて、意識が朦朧とし、己が己とわからなくなっても。私は、信じるしかなかった。大丈夫だ、と。母が死ぬはずがない、と。家族なんて「ウザイ」だけなのだ。家族なんて、ただ、当たり前なのだ——。

その夜に、母の全ての細胞は止まった。母の手はしばらくあたたかかった。

翌日の朝、私は仲の良い友人に電話をした。私は、友人にいつもと同じ、高いテンションで「もしもし」と電話を鳴らした。けれど「母さんがね……」と言った所でやはり、どうしようもなく言葉に詰まった。「母さんがね……」。私

は誰にも、母が癌だと言っていなかった。家族なんて、当たり前。家族なんて「ウザイ」だけなのだ。友人は、いつもと同じ高いテンションのまま戸惑い、「エイプリルフルール？」と聞いた。

——どうしてだろう。母の葬儀をしている間中、考え続けた。姉の高校入学式で撮った母の写真。遺影になると、どうして信じられただろう。どうして、母が逝くのだろう。どうして、私が生きるのだろう。どうして何もしなかったのだろう。どうして、どうして……。答えのない、子供の問いだ。どうして、どうして、どうしてどうして——。

母の死後、家の中は、大きな音をたてて崩れた。「アイーダ」の激しいフォルテッシモが、ただの小鳥のさえずりに聞こえるくらいに。私の「いつも」は、母が作っていたのだと初めて気がついた。「いつも」のそばには、家族がいると。そして「家族」は、当たり前につながったものではなく、もっと脆いものだというこゝも。

姉は、高校卒業後、家を出た。母以外の家族と話さないまま、痩せた体のまま。祖父は、認知症を発症させた。人口膀胱を取り、小便を撒き散らせ「かあさん」といつも祖母を探した。父は、黙々と働いた。大型店が近くに建ち、

商店街がシャッター通りになっても、隣の靴屋が夜逃げしても。借金を重ね、祖母に当たり、酒の量をふやしながら。祖母は次第に、私をさがるように見た。祖父が祖母を探すように、祖母は私を探した。

父は倒れ、病院に担ぎ込まれた。シャツの上から、あばら骨が浮かんでいた。「せんない(山口弁で辛い、の意)」「情けない」「死にたい」。そんな誰かの声を、聞かぬ日はなかった。店は閉めた。倒産に近い、廃業。従業員全員解雇。金を借りたところから、日に幾度となく電話がなった。出歩けば、誰かのひそひそ声がした。家の蛍光灯は、何本か外した。夕飯の品数を減らした。家族が揃えば、そこにあるのは会話にならない会話。「のしりあい」という会話。

私は就職した。退職者が多い、不規則な仕事だった。朝、廊下に大便があった。冷蔵庫は空っぽだった。黙って片付けた。何でもなかったと思っただ。友人がまぶしく思えた。あの頃と変わらない、「家族なんてウザイ」ままの友人。祖父を咎めた。祖父は泣いた。祖母は大泣きした。「死に薬をもつてこい！」祖父は叫んだ。なんて小さい己なのだ。怒鳴ったのは私、けれど、突きつけた言葉の刃は自分に向く。なんで私は、生きているのだ。退職を申し出た。「最近の若者は……」。母を想った。母がいてくれたら、と涙が出た。しかし、母に合わせる顔がない、と思い直した。パートの仕事を始めた。祖父の受け入れ施設が決まった。

う。

未亡人となった祖母は、この九月で九十二歳になる。同じ家で、ずっと暮らしている。日に何度となく私の名を呼ぶが、どんな状態でもやはり、私は祖母のくしゃくしゃの笑顔が好きで、結局あの顔に救われている。

父は新しい仕事についた。順調に体も回復している。借金も変わらずあるが、酒量は随分減り、肌つやもいい。日に日に祖父に似てきて、そのくせ、母のような小言を言うことに時々驚くことがある。

仕事が終わわり、いつものように夕暮れのバス停で待った。帰路を急いでいるのだろう、いつものように、車が何台も猛スピードで通り抜けた。東の空に虹がでていた。あ、と気づいた時、ブッとバスが来た。「虹が出ていたんです」。

あの日、嬉しそうに言った後輩を思い出した。乗り込むと、いつものように高校生が時を笑い、いつものように真っ赤の口紅の女性がいた。私はその中で、もう一度、と窓を覗き込んだ。しかしもう一度は、そのまま発見できなかった。

十年か、と私は思った。あの頃と比べ、家族はうんと減った。父の白髪は増え、祖母の腰は曲がり、私は母が好きだった長い髪を切った。私達は、母と祖父の前で一人ずつ裸になるだろう。もっと明確に、父だった、夫だった、姑だった、妻だった、孫だった、子供だった頃を思い出して。



峰村佐世理

みねむら さより
1984 年生まれ。
山口県出身。
宇部短期大学食物
栄養学科卒業。

受賞の言葉

峰村佐世理

虹、
というものは、不思議です。

見たいときに見れるものではないし、堂々とかかっているのに気がつかない時もある。どこから始まって、どこへ向かっているのか、どんな風にかかっているのか、そんなことをすぐに説明出来る人はいません。その色彩も、見え

方も、人によって様々なのに（きつと、虹自身も己の色は「わからない」と思います）、どういうわけか多くの人間は虹を見ると、顔をほころばせます。そして、前を向き、また、歩き出します。

十年の間に、いろいろなことがありました。十年というのは、もちろんそういうものだと思います。たとえどんななかに美しく見えた十年でも、「本当」はわからないし、逆にどんなにぼろぼろの十年でも、ふりかえればきちんと形になっているときもあると思います。その良し悪しは、己ですらわかりません。私の十年は……と思い、この文を書き

ました。書き終わった瞬間に、スーッとした、思い出深い文です。それこそ良いとも悪いとも断定は出来ませんが、文中のように、ああ、虹だな、と感じました。感じた私は前を向けるようになっていたのだと思います。しかし無我夢中で書いたので、これを「作品」と呼ぶことは大変おこがましく……、まさかこのようなことになるとは……、恐縮しています。

この賞を、大切な家族に捧げようと思います。まずは一生分の愛情をくれた母に。それから、私の原動力である祖母と祖父に、母方の祖母に。そして父と姉には、大きなVサインと一緒に報告できれば。

現実の先は現実である。そう、時には菌を喰いしばって生きてきたけれど、こんな夢のような幸福も、たまにはいいのかな。この受賞は、私にとって「美しい虹」です。なので、また今後精進していければと思います。死んで花実が咲くものか。楽しみ、慈しみ、私の「虹」の先に向かって。大きな励みになりました。ありがとうございました。

エッセイ賞

第四回
文艺思潮

優秀賞

パイロットへの道

流れに乗って

森幸夫

日田市を過ぎると筑後川は玖珠川と名を変え、流れも速くなつてきた。国道210線を福岡から別府方向へ走つてゐる私の車の横で、水は岩々に当たつては泡をたて、川底の砂を潜つてはろ過されながら下流へと走り去っていく。

玖珠町の辺りまでくると川幅は狭まり、静かな流れに変わつてゐた。私は川と道路に挟まれて建つてゐる一軒の喫茶店の前で車を止めた。川縁に立つと、あのとき長男の苦境を救つてくれた流れに感謝の祈りを捧げた。

昭和三十九年、福岡市で生まれた長男は病弱だった。夜毎、熱を出してはおんぶされて病院へ通っていた。彼が健康体になったのは、小学校一年のとき九州大学付属病院で検査の結果、腎臓の働きが悪いと分かり、手術して数年後のことである。片方の尿管が癒着していたのである。

中学生になった長男の夢はパイロットになることだった。病氣は完治していたが、今度は學業が問題だった。彼の成績はクラスでも中ほどだった。当時、プロのパイロットになるには、運輸省航空太學校を卒業するしか方法はなかった。そのためには、地元の福岡県立福岡高等學校に入るくらいの學力が必要だった。十クラスある彼の中學では、學年で五十位、クラスで五位以内が限度である。集中力に欠ける彼の成績をクラス上位へ持つていくため、私は、励ましたりおだてたり、ときには怒鳴ったりもしたが効き目はなかった。

彼が中学二年の夏休みのとき、私は成績向上の試みとしてイギリスへの短期留学を勧めてみた。彼は、英語がほんの少しだけ良かったのと、一人旅が好きだったから大喜び

したが、妻は渋った。百万円以上の費用がかかるのと、果たして成績が上がるのかという危惧からである。私は、妻と長男の三人でよく話し合った。彼は勉強の努力をする条件でイギリスへと旅立った。

帰国して長男は変わった。勉強に集中できるようになった。まず、英語の点数が上がった。釣られるように他の科目も高得点になった。そのうち、全科目総合でクラス一番になった。三年に進級すると、総合科目で学年のトップになったしまった。彼は、夢のプロパイロットへ一歩近付いた。それは、私の見果てぬ夢でもあった。

若いときから乗り物好きだった私は、スピード狂だった。オートバイや車の速度に満足できず、軽飛行機に挑戦しよう、と、北九州の小倉空港で体験飛行をした。知的な計器類に囲まれたコクピットや広い空間を上下左右に自由に飛ぶことができる解放感に魅せられていった。上空へ行くとスピード感はなく、機体は停止しているようにさえ感じられるが、宙に浮いた気分は速度の魅力を上回っていた。しばらく小倉空港へ通ううちに、プロのパイロットへの夢が膨らんできた。正式に訓練を受けるため、私は航空身体検査を受けて愕然とした。聴力が足りなかったのである。自家用免許だけで我慢して、プロへの道は諦めざるをえなかったのである。

あこがれの福岡県立福岡高校に入学した長男は、三年生

思い出させた。彼は事前に検査をさせていたとき、脳波を見た検査官が少し頭を傾げていたようだったと告げた。脳波の検査は、精神神経系の異常の有無を調べるため、脳から出るわずかな電波の波形を記録して判定する。私は、事前の検査では大目にみてくれても、厳しい本番で少しでも脳波に異常が現れているなら、次回の受験は絶望的だろうと思った。だが、口には出さなかった。プロに判定してもらうまで私は諦めたくなかった。

大分県別府市にある病院の院長に電話をして明日の長男の検査を予約した。そこは、私の航空身体検査の担当医でもあり、無理も言いやすかった。

翌朝、失意のため塞ぎ込んでいた長男をマイカーの助手席に押し込むようにして別府へ向かった。車中、私は彼を力づけたりジョークを言ったりしてみたが、彼はうつむいたまま貝になっていた。

国道210号線の玖珠町の辺りで休憩した。川のほとりにボツリと建っている一軒の喫茶店で食事の後、川縁を歩いた。川幅は三メートルにも満たないが、流れは深くて力強く、そのときの二人の姿と対照的だった。しばらく歩いた私は、振り返った。彼の姿が見えない。「まさか」と最悪の事態を想像した私は、元の場所に走り戻った。彼は草の茂みの陰に座ったまま川面にぼんやりと視線を落としていた。私は安心すると同時に、彼の夢が消えていく深い悲

の秋、航空大学校を受験したが一次の学科試験で落ちた。続く国立大学入学試験も不合格だった。ヨット部の部活やガールフレンドに熱を上げていては、合格など望めないのが常識である。公務員の私に三人の子供を私立大学にやる経済力はないため、皆に私大受験は禁じていた。長男は、私の監視状態のもとで一年間勉強を続けた。

次の秋、長男は航空大学校の一次試験に合格した。二次の航空身体検査は、事前に本番と同じ東京慈恵医大病院で検査を受けさせ、異常がなかったので安心していた。

二か月後、福岡空港ビルで二次の合格発表を見てきた長男は、心配して待っている私と妻に一言も口をきかず二階の自室へ上がっていった。嫌な予感のまま後を追った二人は、ベッドで泣き伏す彼を見て不合格を悟った。航空身体検査の厳しさを専門書や航空雑誌で知っていた彼は、再受験が不可能に近いために泣いているのだった。私が妻にそのことを説明したが、彼女は取り乱したように運輸省の係官に電話で抗議した。相手は、ていねいに、しかし、きっぱりと再受験の難しさを説明した。安心して立つ妻を前に、私は自分の出番にあせった。なにか取り掛かるべきかが頭に浮かばない。ただ、このまま引き下がれないことと、自分の二の舞を長男にさせたくないことだけは、はっきりしていた。

私は、長男に身体検査でなにか不審な項目がなかったか

しさを知った。彼の努力の甲斐もなく、すべての夢が流れ去ろうとしていた。あんなに頑張ったのに、と思うと、切なさや悔しさで熱いものが込み上げてきた。私は上を向いてこぶしを握り締めてそれをこらえた。

神さま、私の体で替えられるならどこでも差し上げます。しかし脳波という、分けてあげることのできないもので私たちを困らせるあなたは、なんと不条理な存在でしょう、と恨んだ。そのまま立っていると、腹の底から怒りのようなものが湧いてきた。私は絶望感を振り払うかのように心の中で強く叫んだ。(なにがあらうと、どんなことをしてでも……、絶対、俺が息子をパイロットにしてみせる……)

私にどんな力があるのか、身勝手に見栄っ張りな己を顧みない生き方をしてきた私に。しかし、強く生きる道を子に教えねばならない。それには、己が心の強い父親にならねばならない。今、自分にできることは、天に刃向かってでも子を守る決意を示す以外にはなす術がなかったのである。

川は、二人をいたわるように静かに流れていた。

やがて別府に着いた。院長は長男の検査を終えると、別段、異常はないと言った。私が心配していた脳波に少し乱れはあるが、これは思春期特有のもので、受験のストレスなどでよく乱れるものだと言ってくれた。航空大学校の

検査でも動じないためには、くよくよと悩まないように心がけることです、とアドバイスのうえ、来年、頑張れば大丈夫だと励ましてくれた。救われる思いがした。息子にも、少しずつ笑顔が戻ってきた。

翌年の秋、国立大学に入学していた長男は、最後の航空大学校入学試験に挑戦した。結果は、一次から三次まであつけないほど簡単に合格した。

その後、全日空に入社し、国際線ジャンボ機の副操縦士を経て、最新鋭型機ボーイング777の機長に昇格した。その後も彼は元気に飛び続けている。

私には、彼の幸運があの日、の玖珠川の力強い流れと無関係ではないような気がしていた。

水に関する本を読み漁っているうち、私の流れに対する想いがそれほどの外れでもないことが分かった。水は生体を活性化し、病を癒す他、磁気に感応し、記憶を保持し転写する能力もあるという。やはり、あの日、流れは、長男の心を癒し、私の叫びに共鳴したと考えても不思議なことではなかった。

川を訪れた私は、生命の誕生以前からこの地球上にある水、数十億年の記憶を秘めた不思議な力を持つ水の流れに感謝して、玖珠川を後にした。



森 幸夫

もり ゆきお

1938 福岡県生まれ

福岡市在住
福岡県立香椎高等学校卒業
福岡市消防局勤務
退職後 駿台予備校嘱託
同人誌 無限創刊

「火消しの女」私費出版
第4回銀華文学賞
「分かれ道」三次通過

受賞の言葉

森 幸夫

私は、子どもの頃からぼんやりしていて学業も苦手でした。

高校では剣道、卒業してからは空手を習い、空手では、弱いくせに全国大会というものに出るくらいにはなりました。指導員も審判員も勤めさせてもらいました。

読書との縁は消防官の昇任試験がきっかけでした。その後、学校の勉強という義務感から離れて読むと、本というものが面白いことに気が付いたのです。もう読むのが、「どうにも止まらない」のです。ノンフィクションからハウ・トゥーもの、エッセイから小説と読み漁りました。

よせばいいのに、自分でも書きたくなくて、通信教育の文章教室に申し込むと、赤ペンで夕焼け空のように燃えながら作品が戻ってきます。「畜生！」と、ない頭を絞って書くこと半年間、やや赤が減りました。

それからはカルチャーセンターを梯子して、月謝要員と

小説の書き方

作家を志す人々のために

五十嵐 勉

個人の内部にある思いや認識のエネルギーを、どのようにして多くの人が共感できる普遍的な姿形にするかという作業が「書く」ということです。
「書く」という大きなエネルギーをお持ちの方々に、この本が少しでもお役に立てれば幸いです。(前書より)

素材の見つけ方・選び方／モチーフについて／テーマの捉え方／ストーリーの組み立て／構成／人物の設定／文章についてなど 自家版限定本 800円
ご注文・お問合せは直接文芸思潮までご連絡ください

夜光の時計

八覚正大

定時制高校生たちの姿がここに躍動している
それを見つめる教師のまなざし、作家の眼
彼らとの苦闘と押して、彼らに真の光を当てた
教育現場白書 1600円(本体)

新読書社

TEL03-3814-6791

して勤めながら今日に至っています。

今は小説の勉強中ですが、「女の書き方が下手すぎ！」と講師から言われるとおり、応募しても、どこからも反応なし。

「世の中は甘くないのよ、おとうさん」

交通事故防止の標語のような妻の一言で、書くのを諦めようとしたとき、エッセイで入賞したと言われ戸惑っています。

再び「どうにも止まらない」と、走り続けるか、棺おけに入るか迷っている、と連れ合いに問うと、

「年金が減るから、生きていて！」

隣の部屋から老婆の叫び声がします。若いつもり爺も才能がないとは知りつつ、せめて月謝が要らなくなるまでは走り続ける覚悟です。

こころの傷を癒すために

北沢志保

昨年の秋、私は自分の母親を精神病院に入院させる手続きをとった。

もう二〇年近く顔を見たことも声を聞いたこともない、他人同然の人を、言葉巧みに誘い出し、車に乗せて二〇キロ以上もある道程を、ただ黙々と走った。

もう少し心が痛むものではないかと、震える足でその人の住む家に踏み込んだとき、ただ嫌悪感だけが私の全身を覆った。感覚が麻痺したような、時計を逆回転させたような、何とも言いようのない気持ちになったことを思い出す。私は二〇歳で家を出た。

両親は私が中学生のときに離婚し、私たち子供は母親が引き取った。親権だの慰謝料だの、養育費だの。子供の私がすらすらと覚えてしまった。

父親はよく働く真面目な男だった。まだ生きているが、

脳出血と脳梗塞を繰り返し、昔の面影は薄い。子供が好きで、私のことを今も小さい子のように可愛がってくれている。

弟は、母親似の浪費家で働くことがあまり得意でないようだ。大人になってしまえば、昨今流行りの自己責任という言葉で片付けられそうだが、私にはそうは単純に割り切れない。

外車やスポーツカーを乗り回し、レーサーを気取っていたそう。そのうちに、借金で首が回らなくなり、自己破産の手続きを自らとったそう。

妹は、長い間母親と二人で生活していた。一〇年ほどの間に、母親が妹名義で数千万円の借金をこしらえていたそう、こちらも自己破産した。

彼らの生活ぶりについて、私は何も知らずに過ごしてい

た。知りたくもないし、自分を支えるだけで精一杯の毎日だった。

警察からの電話で、母親の異常な行状が治っているどころか、更に悪化していることを私が知ったのは、昨年の一〇月だった。

今更、私に何ができるといふのだ？

私が一七歳になるまで、母親は私を虐待し続けた。暴力、暴言、誹謗中傷。すべてドメスティックに行われていた。

最初の記憶は三歳だ。クリスマスにシャンパンをこぼした私は、両親にひどく叱られた。父は私を窓から外に出し、反省させた。

それを見た母親が、父親の不在の時をねらって同じことを日常的に私にするようになった。それが始まりだったように思う。

今でこそ、幼児虐待やドメスティック・バイオレンスなどと騒いでいるが、私が保育園に入園した昭和五〇年頃は羨望としてしか認識されていなかった。

小学校に遅刻させてまで、殴る蹴るを繰り返し、最後はたばこの火を押し付けられる。ほうきの柄や木の棒で思い切り叩かれると、内出血が太腿全体にぶわっと広がる。火傷で水膨れになった手を担任の先生にみつかったも、助けを求めることができなかった。なぜなら、その報復で今度はどうなるか、想像すらできないほど恐

ろしかったからだ。

あるとき、鼻血が止まらずに毎晩、枕を血で汚す日が続いた。父は心配して病院に連れていくように母親に告げて仕事に出かけた。父親もよく鼻血を出すので、病院に行つて「遺伝ですかね、血管が弱いっていうか」と母親はもっともらしくドクターに話していた。

私の鼻血は、血管が弱いわけではなく、毎日のように、廊下に頭を叩きつけられ、踏みつけられるせいだった。血で染まった廊下をちり紙で拭いてから、やっと学校に行かせてもらうのだ。

鼻血は小学校を卒業する頃まで、治らなかった。

私は考える。

あの頃、私はどこに逃げれば救われたのだろうか。

今、私が子供で、あの頃と同じように虐待されていたら、どこに逃げればいいのか。

学校と家庭の関係は、昔ほど温かいものではなくなっている。教師だってサラリーマンだ。とりあえず、命に別条がなければ、見て見ぬふりは常識の範疇と考えていたって不思議はない。

近所はどうか。私が素っ裸にされて道路の脇に立たされ、ロープでぎりぎり巻きにされていたって、隣のおばさんは助けてくれなかった。母親は近所の人たちとも良好な関係が築ける人間ではなかったし、関わりたくないのが主婦の

本音だ。

では、やはり当事者（子供）が児童相談所や交番などに飛び込んでどうか。

経験者として言わせてもらおう。絶対に無理だ。虐待などを平気でやる親は、言葉さえも虐待の道具にしているのだ。

家の恥を外に晒すな、お前のために体罰を加えているのだ、誰にここまで大きくしてもらったと思っているのだ、学校の先生に何か言ったらもつとひどい目に合わせるぞ。これだけ言われれば、子供など身動きが取れない。それどころか、やっぱり自分が悪いのではないかと、責任を感じて堅く口を閉ざしてしまう。

たとえ第三者機関に子供が虐待を訴えることが奇跡的にできたとしても、表現力の乏しい子供だったり、ちょっと生意気な子供だったら、すぐに家庭に戻されて「おうちでもう一度よく話し合ってね」などと言われるのが関の山だ。子供がいい子になろうと思えば始めたら、虐待する側にとってはますます都合のいい環境が整うことになる。

私はいい子になろうと思い、両親の離婚の泥沼の中で、母親に加担する道を選んだ。そのおかげで、母親は父親の築いた莫大な財産を独り占めし、多額の養育費を受け取るようになった。それほど利益をもたらしたにもかかわらず、私への虐待は続いた。負のスパイラルがどこまでも私

を追いつく。

離婚調停において、親権を勝ち取った者が財産をも勝ち取るケースは常識だ。後悔は先に立たないものだが、私が真実をきちんと語っていたら、父親は脳卒中を繰り返すこともなかっただろうし、弟妹をこんな窮地に立たせることもなかったかもしれない。

しかし、あの時の私には選択肢はひとつしかなかった。きつとなかった。

両親の離婚から三〇年近くが経過した。

今、精神病院で統合失調症の疑い有りと言われた母親は、私を自分の子供だと思っている。あれを買ってくれ、ここが痛い、きょうは天気がいいねえ。親子の会話を楽しもうとでもいうのだろうか。

私には母親などいない。

一七歳で母親の心の呪縛から脱出する方法を見つけた。それ以来、彼女を母親だと思ったことは一度もない。

あの深い恨みすら、もう消えてなくなった。

年月は経ち、私はただ一人の父親を親として生きている。世間からは薄情な娘だと、今も言われ続けている。そうはいっても母子でしように。母親を捨てて家を飛び出した馬鹿な子供。

あの時、脱出できなかったら、私は弟や妹と同じような生き方をしていたかもしれない。

あの時、家を飛び出していたから、行くあてのない妹を今、そばに置いてやることのできるのかもしれない。

どちらにしても、子供の心に深い傷を残し、死ぬまで背負わせるような事態が、あちこちで起こっているのは確かだ。私の時代より増えているとも考えられる。

命があればよい、と思わないでほしい。

人間が生きていることは、息をしていればよいというものではない。

人間が生きているということは、心が豊かであり続けるということだ。

受賞の言葉

北沢志保

「波乱万丈」という人生に終止符を打ちたい一心で、十代、二十代と暮らしてきました。

幼いころから小説家になりたくもあり、ありふれた家庭の主婦になりたくもあり、どっちつかずの中途半端な生活を続けてきました。

三十代になり、介護やボランティアの活動に情熱を傾けようともがきました。

人間は一生のうちで何回か、食事や睡眠、セックスなんかを差し置いて、生きるために必要な情熱を燃やしたいときがあるように思います。

様々な思い出が交錯する中で、わずか三時間ほどで仕上

受けた傷がなかなか癒えないことを私は知っている。どれほどの痛みで苦しむのか、笑って話せるまでに何年かかるのか。

親が子供にとって絶対の存在であるという認識の危うさを、私は世間に問うてみたい。

私のような子供が、この世界にたった一人でもいるうちは、私はいつまでも叫び続けなければならない。

いつまでもこんな悲しいことがあるうちは、私の傷が痛み続けることになるから。

北沢志保

	きたざわ	しほ
1969	長野県駒ケ根市	赤穂生まれ
1990	長野県立赤穂高等学校卒業	普通科卒業
	卒業後、株式会社ケンウッドに入社	
2001	途中1年間、地元の新聞社で記者をする	
2002	老人保健施設に勤務	
2007	介護福祉士国家資格取得	

げ、発作的な決意として書いた拙作が今回、賞をいただくことになり、戸惑っています。

うれしい、という気持ちとは違いますが、選んでいただいたことにお礼を申し上げます。

書き続けることに挑戦する力をいただきました。

ありがとうございます。

幻日

河林 満

1

今世紀も終わろうかというその夏の八月、牛沼巖は立川駅の駅ビルの九階で、セレモア湯川という葬儀社のウインドを通りすがりに覗くということがあった。

牛沼は一人暮らしを余儀なくされていて、仕事が終わってすぐ、つぎの勤務までの時間がいけば長いときに、こうして雑踏をブラつくのを好んだ。

駅ビルは地下と一階が食料品、二階が煙草や酒や菓子類の嗜好品売り場、途中の三階と四五階が衣料品、六階が仏具や時計宝石類、七八階が書籍とCD類売り場と食堂街、九階がカルチャーセンターとパスポートセンター、それに献血ルームなどで構成されていた。

のがみえる。それをずっと辿り、松本から大糸線に乗換えると、妻が暮らす安曇野のM村にいたる。去年の十月に入籍したばかりだった。

食堂を出て、爪楊枝をくわえながら、ツルツルしてなめらかにひかる通路を歩くのが危うい気がして用心深く牛沼は歩いた。ほんとうに油の帯のように床はつづくのだった。かるい酩酊状態で葬儀社の前に立った。

ウインドをのぞくと、幅四メートルくらいのガラスのなかに、骨壺が陳列されていた。創作骨壺と銘打たれたポスターも貼られている。人体の七割は水分だとなかで読んだ。残りがこんなものに収まるわけだと牛沼はしばらく眺めた。かれには漠然とした自殺願望があつて、それが主要な情緒になっていた。

三人の五十がらみの女たちが話しこんでいる。そのうち二人の女は髪を紫に染めていた。

「うちの主人に、最後も一緒にはいりましょうねというと、素直じゃないのよ。死んでもお前と一緒かよってさ」

シヨーカーのなかの骨壺を指していた。

「うちも話したことがあるわ。ノーコメントだってさ。死ぬ時に考えるとはいったけど」

「臨終のときに考えるの？」

「さあね」

「おふたりとも愛情豊かなのね。あたしなんかもうたくさ

生活するのに必要なもの、さすがに礼拝堂と結婚式場と斎場はなかったものの、とにかく雑多な物資のあふれるそのビルのなかをブラつき、午前がぎりぎり終わる時刻に食堂に入り、朝食と昼食が一緒の食事をつた。ビールを飲んだ。二本飲んだあと酒に変えた。

日曜日だったが夜勤明けの（牛沼は運送会社の夜警をしていた）幾分眠いあたまをもてあましていたが、それが妙に心地よい感じもしていた。愚劣な固着からはなれた。八階の眺望はよかった。灰青色の、厚手の生地におおわれたような空の西のほうに富士山がみえた。多摩丘陵のシルエットがぼんやりと黒くつづくのもわかる。大小さまざまな石塔のような建造物の集落が手前につづく。多摩川がそのあいだを縫って白く光りながら流れる。中央線が走る

んよ。いまからだって、離婚したいくらいだわ」

場の雰囲気になじめない口調に驚いて、牛沼はその女の顔をみた。離婚したがっているのは、牛沼の妻もおなじだったからだ。その女の髪は黒く、色白の顔に口紅が赤い。

「あたしは海にまいてもらいたいわ。田舎の海に」

その女がまたいった。

「何処？」

「高知よ。黒潮にのってアメリカまで行くわ」

「アメリカに行きたいの？」

「そう、若い頃好きだったかれが行っているのよ。処女だった頃にね」

牛沼はまた驚いた。

「あら、ロマンチックね。いまからでも遅くないんじゃない？」

「だめだめ、過ぎた時間は取り戻せないわ。他人と過去は変えられないわ」

歌うような口調だった。

牛沼はもう一度、その女の顔をみた。妻の由美子もアメリカに行ってみたいといっていた。彼女の場合は、心理学が進んでいるからそこで勉強し治療を受けたいというのがその理由だったが。

話題が逸れて、女達は哄笑したりする瞬間をまじえなが

ら遠ざかり、ありふれたひとかたまりにもどった。
 なんのつながりの連中なのだろう。死後の愛情を考える
 女達の集いの会か、と呟いた。
 散骨もわるくないな、とまた呟く。

アパートに戻ると、集合郵便箱のなかに二通の郵便物が
 きていた。手紙は妻からのもので、葉書は井田隆からのも
 のだった。

井田は牛沼が十八歳の頃に所属していた同人誌のリーダ
 ーだったが、何時の頃からか暴力団の幹部になり、最近ま
 た罪を犯して服役しているというのを、当時の仲間のKか
 ら聞き及んでいた。差出人の住所は、東京足立区小菅の東
 京拘置所になっている。

妻の手紙は読みたくなかったが、字面に見入るうちに、
 懐かしさがわいてくるのを避けることができない。しかし
 結局、行き場のない感情だった。

一昨日、長野から投函したと電話でわざわざ妻は伝えて
 きた。昨日の午後一杯には着くはずで、牛沼は仕事に行く
 前に用足しがあつたので、早目に出た。その後に配達され
 たのだろう。

外階段を上がり、二〇三号の自分の部屋に入る。温気が
 むっと身体をつつみこんだ。牛沼は、ドアのノブに使い古
 しのベルトを引っ掛け、先端を壁に取り付けられたガスメ

ータの管に巻き付けた。これでベランダのガラス戸を開け
 ると、風通しがよくなる。この季節にはいつもそうした。
 部屋のなかを風がながれる気配がなぐさめになった。

アパートは、築二十年の古い木造だった。前妻と離婚し
 ない前に、成長した息子に部屋を譲ったのを口実に借りて、
 もう四年になる。いまはここが生活の中心になっている。

何人もの過去の居住者が寝起きをくりかえした跡は床の間
 にも流しにも感じなかったが、和式便所の便器の黄ばみだ
 けはひどくて、牛沼はつよくすりの洗剤をかけてきてタ
 ワシで念入りにこすった。するとピカピカになったので、
 牛沼はここが好きになった。

このあたりはふだんは静かな住宅地で、南に行くくと近く
 に川が流れ、天蓋のある市営プールもあって牛沼は気に入
 っている。

六畳の居間に入ると腰をおろし、ハサミを取って手紙を
 開封した。

予告どりの内容だった。離婚届の用紙に本人のサイン
 と捺印がしてある。保証人の欄に女性の名前が記され、こ
 れにも捺印がしてある。きいた名前で、妻の友人だった。
 離婚するならしたいといつとぶやき、机に放り投げると下
 へ滑り落ちた。拾おうとして、牛沼はそのままにして立上
 がり、ベランダに出た。

洗面器に昨夜の雨が溜っている。この洗面器の面に映る

空の色が好きで、わざとそうしていた。

「わたしはあなたに破壊されました。あなたの嫉妬によっ
 て。去年の十月に籍を入れてからの時間はすべてあなたの
 嫉妬でした。」

十九年前の、わたしが二十歳のときの男性体験を、なぜ
 あなたに責められなければいけないのですか？ あなたは
 その頃結婚していて、こどももいたのでしょうか？ 市役所
 に勤めながら、家庭生活を送っていたのでしょうか？ 愛し
 ているといいますが、愛と嫉妬は正反対です。あなたはわ
 たしを愛しているのではなく、憎んでいるのです」

そこまで読むと、煙草を吸いたくなかった。止めていたの
 に再婚してからまた吸い出した。一服する。灰はこまかな
 虫がおよぐように洗面器の水に浮いて広がる。

「……わたしは、まして精神障害者です。躁鬱病で苦しみ、
 生活のリズムが狂いがちです。不眠にいつも悩み、家事を
 するのも億劫です。癲癇の発作にも怯えています。」

嫉妬に狂うのはあなたの勝手だけれど、そういうあなたは
 わたしの害になるばかりで、とても夫婦生活などできま
 せん。わたしはあなたと離婚します。この決意はもう変わ
 りません。

離婚しなければ、あなたの嫉妬もなくならないでしょう。
 ですから、あなたのためにもいいことなのです。わたしは
 一人で生きていきます。あなたも一人で生きてください。

この用紙に書き込んで、判を押し、返送してください。

あなたが同意しないというのであれば、こちらの家裁に
 調停の申し立てをしなければなりません。時間も労力もか
 かります。私には辛いことです。どうか、わたしのために、
 わたしを愛しているというなら、速やかに同意してくださ
 い。

由美子」

嫉妬は人格障害から来るといつもいう。その矯正に力を
 貸すわ、というのではなく、妻は離婚を求めている。たし
 かに暴行はした。泥酔状態まで飲んでしまった時に妻の腰
 を足蹴にした。「かれがスキンつけてくれたからよかった
 わ」という、最初の男とのセックスを語る妻に逆上したの
 だった。

最初は平和なむつまじい時間が過ぎた。が、たまたま牛
 沼が口にした自分の過去の女性関係から妻のそれへと話題
 が移り、妻は軽い調子で話しだした。「別れたあと、その
 男が肌恋しかったわ」というひとことが、牛沼のなかに厄
 介なものを抱え込ませた。その言葉を思い出すたびに、胸
 が苦しくなるのにうろたえた。こんなこと、と嘲笑してう
 っちゃろうとするのだが、「肌恋しい……」という妻の言
 葉は死んだ子供のよう次第に重くなっていった。牛沼は、
 ことに酒を飲み過ぎると、執拗になじりつづけた。足蹴に
 したのが五回ほど続いたとき、年は改り、ことしの正月を

迎えた。

妻は精神障害者だった。非定型精神病（躁鬱病と軽度の癲癇）を病み、国の認定を受けていた。

あなたはセクハラだ（執拗に過去を訊いたことに対して）、わたしは虐待されている、といって、別居と離婚を妻は宣言した。

腰を蹴る行為は暴力に決まっている。人間だから死ぬことはないが（頭部ならわからない、たとえ加減しても打ち所というものがある）子猫なら確実に死に至る暴力だ。だからその点では抗弁の意思を持たない。

けれどもそういう妻は見た目には勝ち気な女にしかうつらない。自分を抑圧しているのだというふうにはみえない。それが精神障害からくる表情というものなのか、牛沼にはわからないのだが。

暮らせない、という妻の言い分を牛沼は素直に認めた。その程度には理性と常識があったから、それに応じた。たまたま東京のこの立川に再婚する前に借りていたアパートがあったから、ここへ住み、仕事を探して働き始めたのだった。

肌恋しい。それをなじると訊く方が悪いといい、わたしは正直者だからというのが妻の言い分だった。たしかに訊くほうが悪い。それは墓穴を掘るようなものだろう。ということは、人は他人に聞かせればそれがその他人には墓穴

になるものを秘めているということなのか。妻の言葉から牛沼は墓穴を掘り、墓穴は棘に姿を変えて刺さり、傷口は熱をもった。

言葉というもの。「かれを愛していたがうまくいかなかった別れたの」というのなら、まだ牛沼は嫉妬をこじらせることはなかっただろう。そう分析してみた。要するに情緒なのだから。しかし、肌恋しいというのは、あのこと以外に何も指さない。

性愛は男女のむすびつきと、頭でわかっていても、妻の言葉の率直な抑揚に、かえって肉体の反応の事実を感じて、牛沼は苦しんだ。牛沼がどこにもいない風景のなかで身悶えする（反応する）妻がいて、そうさせる（反応させる）男がいる。反応した肉体の所有者としての妻が発する「肌恋しい」という言葉に向かい合う牛沼がいる。

三角関係は妄想の領分だろう。妄想を生きる（闘う）牛沼は妄想ではいられないというのが牛沼の言い分というわけだった。妄想からの解放を模索する愚劣な夏を生きていた。

毎日飲まなくても、牛沼は飲みはじめると飲み過ぎることが多い。アルコール依存症といって、禁酒を妻は勧めた。嫉妬はアルコールからきているということも、妻は持論にしていた。

同意する気持ちがないではなかった。しかし飲まない自

分を生活のなかに実現する気持ちにはならなかった。酒か

結婚生活かと迫られたら、後者を選んだらう。だが、別居生活のなかで、妻という当事者が不在のなかで、飲まない自分を作り出すことに牛沼は抵抗した。（妻との共同生活なくして夫の成長などありえないというのも牛沼の言い分だった）

一方で、いかにもおとなげない自分に舌を噛みたくなるような自己嫌悪をもった。

牛沼には昭和四十八年から二十五年間、立川市役所に勤めた経歴がある。前妻と協議離婚するさいにまとまった金が欲しくて退職したが、公務員でいることに居心地のよくないものを感じてもいた。それがなんなのかはわからない。まもなく四十七歳の年齢だった。

国と共済のふたつの年金を受け取るにさえまだ十五年以上の歳月がある。しかもそのとき世の中の経済がどうなっているかはわからない。老後を考えれば無謀ともいえたが、無謀を欲するようところがあつた。

（牛沼は十年ほど前にある小説の賞を取っていて、文章を書く事で身を立てたい願望もあるのだった）

2

妻の住む土地には北アルプスがみえた。鹿島槍や白馬岳

の山々だ。右手の方角は大町から糸魚川に至るあたりだ。

耳をすますと川の流れが聞こえてくる土地で、牛沼が所帯を持つために借りたのは市営団地だった。三階に住んだ。自分の部屋にした北向きの窓から、よく川の風景をみた。

馴染みのない景色だが、気後れしながらも妻の生まれ育った土地ということで、親和力がおこったことは事実だった。

去年の師走のある日、結婚してまだ二ヶ月のころに、団地を降りて、川岸の土手づたいを散歩した。牛沼たちは手をつないでいた。

妻が処女でないことは本人からきいていた。けれどもまだ他人事だった。（他人ごとに決まっているのに牛沼は過剰に反応する）

散歩の途中にむしった草の青葉を持ち帰ると、アダムとイブのアダムを真似て、素裸になって陰部にテープで貼るという痴戯を演じたことがある。おまえも貼れよという、大袈裟に後込みして六畳の部屋を逃げ回った。数年で五十に手が届いてしまう牛沼は、馬鹿げた振る舞いに潜む危うい欲びに浸った。

素裸になったのをいいことに、青葉を陰部から剥ぎ取ると、妻を引き寄せて行為に及んだ。

「なぜ、おまえはイブにならない？」

顔をくつつけて、妻の唇のうでささやいた。